

例え世界が壊れても、お前を選ぶなんてありえない

月兎耳のべる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本動画は2027年6月4日に放映した『みねうて！ 大文字高校 助太刀部！』のRTA生配信になります。

先駆者である助部ガチ勢、べるべるんさん(@BeruBeru)が発見した『ながら歩きバグ』を用いて、本来なら同時攻略不可能なヒロイン全員を絆MAXにします。

はーい、よーいスタート。

夏 春

目
次

32

1

春

「みねうて！ 大文字高校助太刀部！」 全キャラ好感度MAX撫子
ENDルート生配信RTAはーじまーるよー」

佐野円堂 「皆さん初めまして。『佐野 円堂』と言います。両親
の仕事の都合でこの町に越してきました。皆さんと1日も早く仲良
くなりたいと思っています。宜しくおねがいします」

桜舞い散る美しき『春の月』。

高校生活二年目に突入したオレらの前に。そいつはやってきた。

身長は170cmはあるかないかの痩せとデブの中間の体型。

肩まで伸びた黒髪はその目元すら覆い隠し、どこか一昔前のエロゲ
主人公を彷彿させる。

しかしてそんな見かけと相反して緊張の素振りも見せないハキハ
キとした自己紹介。変わらぬ表情。簡潔な紹介ながらも、その第一印象
は驚くほど印象的であった。

突然の知らせを受けた生徒達は驚きを隠せずにざわざわと騒ぎ出
し、オレもまた新たな出会いに興奮し、思わず前の席に座る『一華』に
話しかけていた。

「オイオイ、この寂れた高校に唐突な転校生。これは波乱の予感がす
るぜ一華」

「……」

「数多の恋愛シミュレーションを攻略してきたオレの考えが確かなら、
アイツは間違いなく嵐を呼ぶ転校生だ。頭脳明晰語学堪能。古武術
に精通しており、生き別れの妹がいる。幾千もの戦場を越えて尚不敗
で、だけどその経歴は誰にも聞かせない。今回、ヤツはこの高校に巣
食う謎の化け物を退治するために仮初の身分を甘んじて受け入れて
――」

「私の考えが確かなら、お前はエスパーを遥かに通り越して精神病に
肩まで浸かっている。もう入院しても無駄だから今すぐその窓か
ら飛び降りる事を推奨するけど」

「過ぎたる能力は人に排斥される運命……か。オレは悲しいよ一華、幼馴染のお前ならオレを理解してくれると思つたのに」

「草も生えない」

後ろすら振り向かずに言い放つたれた相変わらずの冷たいお言葉。チビで眼鏡でボサ髪ショートで口が悪くて人見知りのコイツはいつになったら愛想という言葉を覚えるのだろうか。

「——あー、席はそうだな。じゃあ『立浪』^{たつなみ}。お前の隣でいいな」
「えっ。あーハイ。いつすよ」

おおっと、山田先生がいきなりオレの席の隣をご指名か。

これで一華の隣とかだったら面白かつたんだが……一華こつちをじつと見てどうした？

ああもしかして代わって欲しいのか？ それなら代わってやってもいいぞ土下座するんだつたらなあ！ はーっはっはっは——

「あ——つつつつでえ!？」

「ごめん肘が滑った」

「うるさいぞお前らー。じゃあ周りのやつは佐野に教科書とか見せてやるようにな。まだ教科書が届いてないらしいんだ」

オレが鳩尾に肘を受けて悶絶している中、新生入生は気が付けば隣に座っており。そして心優しい事に机に突つ伏すオレに氣遣つて声をかけてきてくれたではないか！

佐野円堂 「大丈夫?」

シンプルな一言だ。

だが毎日に及ぶ一華の邪智暴虐に晒されるオレにとっては、骨の髄まで染み渡る一言であつた。

「……へへ、格好悪い所を見せたな転校生。だが大丈夫だ、オレはまだ戦えるさ。コイツの恐怖政治に負けたりなんて、しねえ……!」

「何が恐怖政治だ何が。いきなり人聞きの悪い事を言わないでくれる?」

「暴力による言論の弾圧、これが恐怖政治でなければ何と言う!」

「お前のそれは言論じゃなくて悪意ある妄想っていうんだよ。また1つ賢くなつたな? ……騒がしくてごめんなさい。私の名前は『紫花^{しばな}」

「華^{いちか}」。よろしく」

「おつと、そうだそうだとオレも自己紹介しておこうか。オレは『立浪^{たつなみ}草^{くさ}』だ。ソウちゃんと呼んでくれよな！ マイ・フレンド！」

○ソウちゃんと喜んで呼ぶ。

●普通に挨拶する。

佐野円堂 「よろしくね、二人共」

【この選択肢は上を選ぶと本来なら草の好感度が上がる筈ですが、バグのせいで上がりません。よって返答文字数の少ない下を選びます。】

二人で揃って自己紹介をしたのだが、ソイツはオレの茶目っ気にもただ簡潔に返答するだけで正直面食らった。結構なノリで初手をかましたのだが、まさかの涼し気な顔で全スルーである。

こいつ……もしかしてクール系主人公で高校デビューするつもりか？ いいだろう、そっちがその気ならすぐに化けの皮を引き剥がしてやるぜ！

「オイオイオーイ、フレンドよ。そこはソウちゃんと呼んでくれてもいいんだぜ？ 恥ずかしがる必要はねえ、クラスじやみんなオレの事ソウちゃんソウちゃんと呼ばれてるし、オレもその呼び名が気に入ってるんだ。だから」

「佐野君も気の毒だね、こんな24時間365日うるさい奴の隣だなんて。今すぐ別の席に代えて貰うように言っておこうか？ ちなみに今コイツが言ったの嘘だから気にしないで。草^{くさ}って呼べばいいから」

「ちよいちよいちよーい、幼馴染の一華さん？ 開幕ネタバラシやめてくれますう？」

「ちなみに今の幼馴染ってのも嘘だから」

「そこは本当だからな!？」

「立浪ー、紫花ー、お前らの夢は漫才師か何かかー？ もっと真つ当な職につきたいんだったら先生の言うこと聞いとけよ馬鹿野郎どもが」

「はーい先生」

「すみません先生」

叱られたので交流は中断。余計に叱られたと言わんばかりの一華の殺意の目をスルーしながら、オレは隣席の転校生にまた後でな、と伝えた。

高校二年目の春、見慣れたクラスメイトの中に一人混ざった異色の転校生！ オレはゲームで見たような展開に胸を躍らせながらも、次の休憩時間からめちやめちや濃密に交流を深め、即『絆MAX』にしてやろうと固く誓ったのだった。

§ § §

「まずは歩くギャグキャラ草から攻略します。こいつは即墮ちする上、絆アイテムが本攻略のラストアイテムになります。春の間に墮としてしましましょう。」

転校生、佐野円堂——見た目からして完全にクール系主人公だと思っていた奴だが、実は中身もかなりのクール系主人公であった事が判明した。

登校初日だから緊張していてもおかしくないのに、クラスメイト達に質問攻めにあってもその全てに的確、かつウィットな答えを返せる胆力を見せつけてきた。

質問への回答から分かる奴のプロフィールは下記の通りだった。

- ・ 誕生日は2月10日。AB型。
- ・ 大都会から来た。
- ・ 両親は仕事で忙しくて、今は親戚の家に住んでいる。
- ・ 住んでる所は学校のすぐ近く。
- ・ 趣味という趣味はない。
- ・ 部活は今の所何に入るか考えていない。

今の所ありきたりな経歴しかないようだが、オレの勘は奴が只者ではないとひっきりなしに伝えてくる。

そしてその勘が言っている——佐野がこの『大文字学校』に嵐をもたらす存在であるという事を！

故にオレは奴の秘密を深るため自分から校内の案内を買って出る

事にした！

幼馴染の一華もそんなオレの殊勝な心がけに関心してくれたのだろう、先生のいる前で「二人で校内の案内をします！」と大声で宣言したところ、滅茶苦茶渋い顔をして快諾してくれた。

「じゃあ一通りの場所を教えるぞマイ・フレンドよ。まずは『職員室』だ！ オレの後についてきてくれ！」

佐野円堂 「分かった」

「何であんなにテンション高いんだ……佐野君、別にあの馬鹿を見習ってダツシユする必要はないから。まあどうしても走りたいって言うなら止めないけど」

【Tips】

十字キーで移動ができます。

もしも走りたい場合は十字キー＋？ボタンで

走る事ができます。

走って立浪の後を追ってみましょう！

まずは案内開始早々、開幕ダツシユを決め込んだ！

奴の運動神経はオレの予想が正しければ抜群の筈……！ まずはそこを見極める！

教室の前から駆け出して最適な角度でコーナリング、そして階段を三段飛ばしで駆け下りて1階の長い廊下を全力ダツシユ！ 最早庭とも言えるこの学舎で最適化に最適化を重ねた移動ルート構築、例えば奴が運動神経抜群であろうとも地の利を持つオレを抜かすことは流石に出来ないだろう！

——そう思っていた時期がオレにもありました。

最後のストレートをダツシユするオレの耳が突如拾ったのは追随する謎の擦過音。

廊下を擦るような音と一瞬の停滞、それが間断なく後ろから聞こえてくるのだ。何の音だ、と振り向いた時には——オレはその顔を驚愕で歪める羽目になった。

その存在とは……特徴のない中肉中背の体の持ち主、頑なに目を隠し続ける髪の持ち主、そう佐野である！ 奴はスライディングを繰り返

返して廊下を移動をしていたのだ!

円堂は唾然とするオレを置いてそのまま目的地である職員室の前に到着。

そして涼し気な顔でオレの到着を待っていた。

【視聴者の皆様はお馴染みかと思いますが、移動はスライディングが一番早いです。今後ローリングを覚えるまでは全てスライディングで移動します】

「へ、へえ〜中々やるじゃねえかマイ・フレンド……ま、まあ今は小手調べだしな……次は『美術室』だ!」

い、今のは油断しただけさ。まだ案内は終わっていない! 次にオレは3階の奥の美術室に向けて猛然とダッシュを始めた!

恐るべしは佐野か、オレのダッシュに反応して即座にスライディング移動を始めた。

残念ながら直線では奴のスライディングの方が速読が上……だが階段は三段飛ばしテクをマスターしたオレの方が上の筈! 大文字高校の『スピードオブスピード』と呼ばれたオレの速さ、きつちり見せつけてやるぜ。

しかし、オレの目測は甘いと言わざるを得なかった!

なんとヤツと来たら階段すらもスライディングで駆け上がったオレとの差をぐんぐんと引き離して行くのだ。コイツ、まさかここまで……!

「ちい、やるじゃねえかマイ・フレンド! だがなあ、3階美術室前は美術部連中のゴ…芸術品が色々置いてある! あの障害ぶ、芸術品を避けて移動出来るかな!?!」

【Tips】

○ボタンでジャンプができます。

障害物がある場合はジャンプで

移動すると良いでしょう。

【Tips】

L1ボタンと十字キーで進行方向に

スライディングもできます。

回避に使ったりと、色々な場所で活躍するかもしれません。

今日の美術室前は狙い通りゴミ山盛り！ 人とは思えない彫像、落書きにしか見えない絵画、謎のオブジェが点在したこの廊下を最適ルートで移動出来るかあ!?

「——何で出来てるんだよお!？」

結果は奴の圧勝だった。

オレは美術部どもの置いてあったオブジェに足を取られて転倒し、オレが起き上がった時には美術室前である涼しげな顔を見せていた。「貴様の実力、もしかしたら本物かもしれねえな……次がラスト！」

『旧校舎』、3F、『多目的室前』にご招待だア！」

次こそ本気だ！ この校舎で1年過ごして見つけたオレだけが知る研究会最短ルート！

新校舎と離れた位置にある旧校舎、本来なら1階まで降りなければいけないだろうがあえて2階中央の窓から飛び出して、庭の木伝いに着地すれば大幅ショートカットが可能！ 更に旧校舎は取り壊しも予定されているせいでオンボロだ！ 間違えたルートを通らねば足止め間違いなし！ そしてその正解ルートを佐野は知る由もない！ この勝負、最初からオレの勝ちが決まったようなものだ！

くくく、奴め。試合放棄か？

オレより前に出ていないと思ったら、廊下の隅めがけてひたすらスライディングとジャンプを繰り返してやがる！ そちらが早々に諦めるというのなら圧倒的な差を見せつけるだけよ！

【3回目のかげっこは初見プレイヤーが勝つことが想定されていますが、壁抜けをすれば造作もなくクリア可能です。壁抜けにはコツがあります】

階段を降りて二階へ！ 廊下中央までダッシュしておもむろに窓めがけてジャンプ！ 木の枝に足を乗せたら勢いを殺さずに地面へと着ちゅつ、転倒！ いや、この程度屁でもねえ！ 旧校舎に繋がる道を猛然と駆け抜けて、下駄箱通りは右端！ 階段は必ず二段飛ばし

！　そして二階奥の部屋までジグザグ走行！　穴の空いた床を的確に避けて移動だ！

研究会前は未だに誰の姿も見えない！　間違いないコレはオレの勝ちだ！　ゴールまであと10mもないところでオレはスピードを落とす。

ふっ、オレと来たら大人気なかったな、研究会の存在すら知らねえ素人に本気を見せるとは……。

「だが貴様のスピード、オレに匹敵するものだというのは認めておくれ……！」　間違いなく貴様は強敵だった」

佐野円堂　「立浪君も中々早かったよ」

「へっ……よせやい、オレも本気になるくらいだったんだぜ。ひよつとしたら大文字高校のスピードオブスピードの名を渡せる……かも………？」

気が付けば奴、円堂は助太刀研究会の前に立っていた。

最速を極めた筈のオレが気がつかない内に、抜かして先回りしたというのか!?　何というスピード、何という技術！　コイツやっぱり只者じゃあねえ！

「お、オレの負けだ……円堂。いや、マイ・フレンド。貴様にこそ『スピードオブスピード』

の名前がふさわしい……！」

【称号】

『スピードオブスピード』を獲得した。

移動速度がいつもの倍になるぞ！

【本RTAのマスター称号①です。移動速度は命】

「どこに行ったと思えば……やっぱりここに居た。で、何この雰囲気。今度は何やらかしたんだい？」

「今ここに1つの世代交代が起きたというだけさ、一華。やはり円堂は一味違うぞ……！」

「そうかい。で、ここに佐野君を呼んだって事は……勧誘するつもりか？」

ふっ、流石は一華……伊達にオレの幼馴染をやってきた訳じゃねえ

な。そうさ、ここまでの紹介は前座に過ぎない！

「マイ・フレンド、校内最速の異名を持つオレを越えた男の中の男よ。貴様に頼みがある……！　どうか我らが『助太刀研究会』に参加して欲しい！」

佐野円堂 「助太刀研究会？」

「活動拠点旧校舎三階多目的室！　活動時間帯は24時間365日！

学校の内外問わず駆けつけます！　トラブル悩み事なんでもござれ！　我らが『大文字高校』の縁の下の力持ち！　それこそが助太刀研究会だ！」

オレは後ろにある教室、その扉に貼られた「助太刀研究会」の紙を見せつけて宣言した。

ここは生徒会の存在しない我らが大文字高校における唯一の自治組織！

日頃の生徒たちの不満！悩みを一身に引き受ける場所なのである！

「我らが大文字高校はお察しの通り小さい……全校生徒100名も満たぬ片田舎の定員割れ公立高校。生徒会と言う物など存在せず、今まで生徒たちは鬱憤を積み重ねる日々を過ごす他なかった……！」

「そんな現状を憂いたオレは1年前、この研究会を立ち上げた！　助太刀研究会！　生徒の、生徒による、生徒のための互助組織！　大文字高校での活動をより快適にするために活動を続けたのだ！」

「しかし残念な事に！　同じ志を持つ人は少なかった！　皆が皆不満を抱きつつもくすぶり続けるだけのボンクラだらけ！　学校や生とのために立ち上がるうとしたその人数は……『4人』！　6人集まらなければ部活としても認められないのだ！」

「マイ・フレンド、まだ出会ってまもないがオレには分かる。貴様が何よりも強い意思を持ち、そしてこの時の止まった学校に変革をもたらすであろう逸材である事が！」

いまだ表情の1つも変わらない佐野に、オレはまるで告白するかのように片手を差し出してお辞儀をした！

「さあマイ・フレンド、この手を取って伝説の一步を踏み出そうじゃな

いか！」

——決まった。

噛むこともなく連ねた宣言。まさしく名言。

後世に残してもいい演説だったとオレは認めるだろう！

「……はあ。草がいきなり変な事言いだしてごめん。代わりに謝っておく」

「おい、どうして謝り出す!？」

「そりや謝るよ。いい佐野君。今しがたコイツが言った事は8割型誇張だからね」

「こちよ……は、はっはっは一華君何を持ってそんな事を……」

「実質活動時間は1日平均1時間未満。過去の活動実績はほぼ何もなし」

「校外活動の経験はゼロで、依頼が来るのは稀に稀」

「依頼の中身もイタズラ、暇つぶしが9割。本気の悩みは1割未満」

「暇な時間はあてがわれた教室で漫画を読んで、ゲームをするだけの駄乗り場——それが助太刀研究会の実態。志高く環境改善を願っている存在など、この場所には誰一人いないよ」

「一華！ 貴様もまた研究会の一員だと言うのにどうしてそんな事が言える！」

「一員だからこそ言えるんだって。佐野君がギャップに失望する前に伝えておくのは最低限の礼儀でしょ——あ、ちなみに私は悲しいことにこの研究会の一員だけど、この場所を体のいいサボリ場としてしか見ていないから」

「……うん。いやまて。待てマイ・フレンド。違うんだ早まるな。一華はそうかもしれないが少なくともオレは違うぞ!？」

「へえ。じゃあ聞くが草、お前が持ち込んだ漫画の数々、あれは活動には不要じゃないかい？」

「あ、あれは……そう、参考書だ！ それにあれらは各部室に転がっているいらぬ物をリサイクルしているだけであって買い足しなんてしてないし、ただ様々なシチュエーションをポップカルチャーを通じて勉強をだな」

「給湯器、ベッド、お菓子、冷蔵庫、扇風機、テレビ——あれらは何？あれもいつぱしの研究会には不要じゃ？」

「あれは、我々の活動が滞りなくすすめるような……その、環境改善の一貫だ！」

「週5のうち、1日しか集まる事もないのに？ 部員が全員集まった試しもないのに？」

くうう、一華、今日は執拗に追求するじゃあないか！ いつもはそんな研究会で好きなようにくつろいで居るといふのにさあ！

「一華、一華よ……ちよつと落ち着こうか。キミは誤解している。確かにオレ達の活動は少なかった、が。今までは準備期間だっただけさ。オレは確信している！ 彼が入会することで我らが助太刀研究会は本領を発揮するのだ！」

「ちなみにこいつが必死になつて佐野君を引き止めるのは、研究会から部への昇格による予算目当てだから」
「ぴきっ」

お、おとおお、どどど、どうしてそそそそれを!?

い、いや待て違うんだ。これは本当に理由があつてだな！

「いまの反応で理解つたよね佐野君。この研究会に未来はない。前途あるキミはここ以外にするべきだよ」

「言外にオレに前途がないような言い方はやめろ！ マイ・フレンド、頼む入ってくれ!! な!!」

●喜んで入会する。

○考えさせてください……。

佐野円堂 「入会するよ」

【ここで下を選んでも草に延々と懇願され続けるだけです。上を選びましょう】

「賢明だね。そうした方が……うん？ ちよつと待って、今何て言つた？」

「っしやおらああああああ!!」

っしやおらああああああ!!

やはり佐野はオレの見込んだ男だった！

佐野イズマイ・フレンド、いや、マイ・フレンド・フォーエバー！
「か、考え直して佐野君。こんな雑草の口車に載せられてはいけな
いって。ここ以外は全てまともな部活動だ……いや、佐野君がこんな
ただの溜まり場でドラツとしたいというのなら止めはしないけど
……」

佐野円堂 「研究会の理念に惹かれました。

これから学校の為に尽力します」

「佐野君!？」

はっはっは、あの一華が目をひん剥いてやがる。やはり佐野は只者
じゃあないな！ どこまでマジか分からないが……。

まあ何はともあれこれでめでたく部への昇格にリーチがかかった
！ 今はそれを純粹に喜ぶとしよう！

【Information】

『助太刀研究会』に入会した。

放課後、暇な時に顔を出してみよう。

時々イベントが発生するぞ！

§ § §

【本格的に草を攻略します。草は常に行動をともにすれば速攻でMA
Xに出来ます】

こうして我々助太刀研究会に新たなメンバーが加わった！

研究会の部への昇格まであと一歩……残りのメンバーは追々探す
として、探す間に新メンバーを逃すつもりはない。

オレはパーソナルゾーンなど関係なしに佐野に絡みまくり、友好度
をあげようと試みた。

幸いな事に佐野はオレのウザ絡み一歩手前の行為に快く答えてく
れるばかりか、自分の方から話しかけてきてくれた！

奴もオレと一刻も早く親交を深めたいのだろう……だというのな
ら遠慮しないぜマイ・フレンド！

「マイ・フレンド、研究会での初仕事だ！ まずは……部室の掃除だな
！」

佐野円堂 「分かった」

新メンバー、つまり一番の若輩であることをいい事に、事あるごとに雑用を命じた。

奴は嫌な顔ひとつせず、洗練された動きで瞬く間に、かつ完璧に雑用を終わらせた。

「マイ・フレンド、その問題は分かるか？ オレにはわからん！」

佐野円堂 「我が命の また 全けむかぎり 忘れめや いや日に異けには 念おもひ益ますとも」

席が隣であるのをいい事に、事あるごとに声をかけた。

奴は素知らぬ顔でどんな難問も全問正解。オレにはない聡明さを披露しだした。

「マイ・フレンド、一緒に昼食買いに行こうぜ！ 購買部は激戦区だ、早いもの勝ちだから気をつけろよ！」

佐野円堂 「競争なら負けないよ」

奴が弁当を持参しない事をいい事に、事あるごとに昼を誘った。

奴はお得意のスライディング走法（と言うか移動は常にスライディングだ）で常にオレより先に食堂につき、好きなパンを獲得していった。（気の所為ではなければ、奴の移動スピードは前より格段にあがっていた）

「マイ・フレンド、一緒に帰ろうぜ！」

佐野円堂 「勿論だよ」

住んでる所が近い事をいい事に、事あるごとに帰路を同行した。

奴は帰るときまで全力疾走だ。常にオレをスライディングで置きざりにして見えなくなってしまうが、それは些細な事だ。

「マイ・フレンド、一緒にトイレ行こうぜ！」

佐野円堂 「構わないよ」

奴は断らない。

「マイ・フレンド、その面は難しいぞ！ まずは先に弱点を……何!? オレが言わずとも先に……貴様、やりこんでるな！」

佐野円堂 「答える必要はない、でしょ？」

奴は失敗をしない。

「マイ・フレンド！ この前貸してくれた漫画楽しかったぜ！ ……
今度はオレも秘蔵の本を貸してやるからな」

佐野円堂 「楽しみにしてる」
奴はあらゆる個人のツボを抑えており。

「マイ・フレンド！ 昨日は助かったぜ……隣町の草野球チーム、唾然
としてたぜ。33―4で大勝だなんて、中々出来るもんじゃねえよ
！」

佐野円堂 「マグレだよ」

奴は運動もピカイチで。

「マイ・フレンド！ うちのニャー子を助けてくれて、マジでありがと
うな……！！ お前がとっさに手術してくれなかったらどうなつてた
事か……！！」

佐野円堂 「無事に生まれてくれて良かった……」

奴はどんな状況でも絶対に動じない。

奴が入学してからたかが一週間。されど一週間。

だと言うのに絡みまくつたせいとか、オレは一週間どころか年単位で
過ごしたような気分を味わっていた。

炎天下険しい真夏の町對抗草野球でも八面六臂の大活躍を見せた
事や、出産予定のなかったニャー子が急に子供を作っていたりしても
動じずにお産を手伝ってくれた事も含め、最早この一週間はオレに
とって一生忘れられない思い出だろう。

【草のイベントは時系列がぐちゃぐちゃです。冬でも真夏に飛ぶこと
があります】

「マイ・フレンド……いや、『マイ・ベスト・フレンド』——オレ、お
前が友達でいて本当に良かったよ。これを受け取ってくれ」

だから、オレはある日の放課後。

奴を屋上に呼び出していた。

【アイテム】

『ぼろぼろのミサंगा』を獲得した！

コミュ不足なんてなんのその！

親交の少ない相手でも踏み込んだ

話をする事が出来るぞ！

「マストアイテム②です。この小汚いアイテムが猛威を振るうのは夏からです」

「……恥ずかしい話だが、オレは昔極度の人見知りだった」

「唯一話せる相手と言ったら一華だけ。それ以外にはだんまりで、あまりにも人見知り過ぎて虐められてたりもした」

「だけどな。子供の頃、これがある人に貰ったんだ。その人も昔は極度の人見知りで虐められてたらしいけど……自力で克服して今では超有名なコメディアンになっていた」

「その人はオレにミサंगाを渡してこう言ったよ。『馬鹿を見たっていい、むしろひたむきな馬鹿になれ。周りから笑われ続けてもひたむきであれば、いつかお前は誰かに振り向かれるだろうから』ってさ」
「このミサंगाにはその人とオレの誓いが含まれてるんだ……もうすっかり話せてるお前に渡す必要はないかもしれないが、何だろう。お前にだけはオレの大事な物を受け取って欲しいってゆーか……な、何か恥ずかしいなコレ！」

「ま、まあ何だ。これからもよろしくな！ マイ・ベスト・フレンド！」

佐野円堂 「こちらこそよろしく！」

オレと佐野は夕日照らす屋上で、がっちり握手をしあった！

出会ってから一週間という短い期間でも、オレの中では10年連れ添ったような強固な絆が出来たと実感していた。

やはり、オレの目に狂いはなかった！ 佐野よ。この高校生活最高の物にしような！

【Information】

『立浪草』との関係が

『絆MAX』になった！

彼との熱い友情はいつまでも

続くだろう……。

「これにて草の攻略が完了です。流石はチョコチョコですね。もうコイツとはほぼ話す必要はないので、次の日から紫花つちを攻略してゆ

きます。」

§ § §

「……何してるんだ草？ 根無し草みたいにうろついてたお前が研究室に根を貼るような真似して……とうとうオンボロ旧校舎とともに土に還る事を決めたのかい？」

「失礼な事を言うな一華……オレは最近悲しいだけだ」

「そうなんだ。じゃあ私は用事を思い出したから帰るよ」

失意の縁にあるオレに対する幼馴染の風当たりは相変わらず厳しい。

椅子にも座らず、研究室の床の上で力なく寝転がったオレを見て、早々に出て行こうとする一華にオレはゴキブリもかくやのスピードで縫^{すが}り付いた！

「貴様、そこまで来たら『どうしたのよ？』とか悩み聞く所だろ！ 何でそんな塩対応なんだよ!? それでもオレの幼馴染か!？」

「抱きつくなそのまま枯れ果てる雑草が。お前が幼馴染になったのはこの私の一生の不覚であり汚点だ10秒以内にどかないと除草剤をぶちまけるぞ」

「除草剤を持ち歩く女子高生ってなんだよ!？」

「ゼロ」

「ぐああああああ——っ!？」

オレは顔面にヘアスプレーを浴びて悶絶したが、断固として一華にしがみつき続けた結果、どうにかして悩み相談のテーブルに着かせる事は成功した。

「はあ……それで何がどういう悩みなんだい。10文字まで聞いてあげるからちやっちゃと言ってくれないかい」

「短すぎる……いや、まあ言ってしまうばあれなんだ……その。佐野が最近冷たい」

「1文字オーバーだから帰る」

「こらえて！ こらえなさって!」

マジで席を立とうとするとか塩対応過ぎるだろう!?

どうして以前にも増して塩っ気が強いんだ……はっ、そうか。まさか一華。貴様、オレが最近構わなかったから嫉妬して——!

「……何だいそのニヤついた顔。滅茶苦茶不愉快」

「いや、何でも。何でもないさ……まあそれはともかくマジで聞いてくれ。オレとマイ・ベスト・フレンドの話を」

「正直あんまり聞きたくないんだけど。二人って最近カップルもかくやの勢いでつるんでるよね、惚れた腫れたの話ならマジで勘弁して欲しい」

「ち、ちがつ、んな訳ねーだろ! アイツとオレは男同士で……!」
「本気でやめてくれない?」

アイツは没個性の塊みたいな顔してるとは言え別にブサメンとは思わないしむしろ整ってるけど、オレにその気はない!

……まあ、アイツの頼りがいとか付き合いの良さとかはオレが女だったら惚れてたかもだけど……じゃなくてだな。

「シウオツホン。まあ、オレと佐野は最早フレンドの域に留まらずにベスト・フレンド——魂を交わしあつた心の友と言ってもいいのはご存知だと思うが」

「もう金魚のフンみたいにべったりだね。でも冷たいって……何? 喧嘩したって事か?」

「喧嘩上等だ! 魂の友たるアイツとは喧嘩しようが秒で和解出来る自信がある——拳と、情熱でな! ただ、喧嘩しようにもその心当たりがないんだよな……ほら見るよ」

「何、これみよがしに腕上げて……ん? 草、いつも付けてるミサンガはどうしたんだ?」

「佐野にやった」

「はあっ?! あれは草の大事な——!」

「いいんだ。オレはアイツとの友情と信頼に応えたいから渡した」

一華はオレのミサンガのルーツを知っている数少ない人間の一人だ。

一時期は一華もオレの事を色々世話焼いてくれてたっけか。

「……まあ、草が良いなら良いけど。それで？」

「うん。まあミサンガを渡したんだ。そしたら何か知らないけど次の日からぱったりと会話がなくなった」

「ふーん……ねえ、つかぬことを聞くけどミサンガは時々洗ったり？」
「ミサンガは自然に切れるまで付けっぱなしが基本だろ。肌身離さず身につけてたぜ！」

「それじゃないから。草のミサンガが何か臭くて、それが癩しやくに障さわったんじゃない？」

「くふうッ!？」

ま、まさかのオレの大事なアイテムのせいだとオ!?

いや、馬鹿な……そんな異臭のするような事は……いや、汗とか泥とか色々吸ってるのは認めるけど。小学生の頃からつけっぱだったけど……!？」

「あ、あーごめん……今のは冗談だからね、うん冗談。多分そんな事ないから、ね？ それ以外の理由があるんだよきつと」

「……そこでマジの取り繕つくろいするのやめてくれ。オレの心が死ぬ……」

「ただねえ……仮にもそのミサンガは大事な物だっていう事は伝えてあるんだろう？ だとしたら佐野君はいきなり邪険にする事はないと思うんだけど」

「だよなあ……オレもベスト・フレンドの人となりを知って、そんな事するわけ無いと思ってるんだが……授業中に声をかけても反応ないし、休憩時間は『ごめん後で』って袖にするし、一緒に帰ろうとしても『また今度』って断るし……ここ最近ハベスト・フレンドと共に過ごす時間が皆目見当たらないんだ!？」

その断りムーヴも全く持って徹底しているからいつそ笑えてくる。

早朝はオレが家まで迎えに行く前に出かけているし、授業中は徹底的に無視。休憩時間が始まったと同時に連続スライディングでオレの前から姿を消し。昼食になると教室の隅にジャンプとスライディングを繰り返してどこかへ文字通り消える。研究会に顔を出しても一切合切会う事はないし、一緒に帰ろうとした時には学校には影も形

も見当たらない。

「ただ忙しいだけじゃないかな。佐野君、放課後は図書室に居たり、近くのコンビニでバイトしてる所も見かけてるし」

「それ知らないんだけどお!？」

「図書室勉強にコンビニバイト!? 親の都合で転校とは言っていたが生活が苦しいのか奴は!？」

「畜生水臭いぜ、オレだったら幾らでも金を貸すのに……いや、それよりも何故一華がそれを知っている!？」

「貴様、オレと言うベスト・フレンドを置いて佐野とお近づきに!」

「馬鹿なの? 死にたいのかい? ただ偶然が重なってるだけ。佐野君が勉強してるところに出くわしたり、何気なくコンビニ行こうとしたら居たり」

むう……確かに一華の様子は平常心そのものようだが……でもオレには分かっているんだぞ。最近マイ・ベスト・フレンドの関心が一華に向きつつある事を。オレと過ごさぬ代わりに一華に話しかける頻度が増えている事を!

「くっ……マイ・ベスト・フレンド、お前はすでにオレは攻略済みだと言いたいのか……! まさかハーレムエンドでも目指しているのか!」

「さも当然のように私を勘定に含めるな。あとお前も勘定に含まれようとするな」

「?」

「その何言ってるか分からないって顔をするの本気でムカツク」

いやいや当然オレも攻略対象の一人だろう。

最近の恋愛シミュは男性ルートももれなく完備している。(まあ匂わず程度の友情で止まるが)

さしずめ佐野が主人公ならオレはサブヒロイン、そして一華はメインヒロインというところだろう!

「はあ……それで相談は終わりでいい? 私もう帰るから。草はいい加減そのクソみたいなゲーム脳は本気でやめたらどうだい」

「ゲーム脳とは失礼な! 今の所オレの恋愛シミュ観と佐野の行動、

の次に好き。」

佐野円堂 「どちらさま？」

一華と机を向かい合わせて一緒に勉強をしていた佐野が首を傾げれば、立ち入った葛が目にも留まらぬ速さで佐野のもとへ移動。そして奴の手を取って顔を近づけていた。

「あらやだやだやだあ、君が新入生!? 可愛い〜っ、まるで子猫ちゃんみたい! アタシは風仙葛って言うの! 気軽にカズちゃんって呼んでね!」

「葛、圧。圧が強すぎる。鼻息浴びせすぎだ。マイ・ベスト・フレンドが困ってるだろ」

「ま。ごめんなさいね、アタシったらつい興奮して……」

「相変わらずだねカズちゃん。久しぶり、二ヶ月ぶりくらいじゃない? 今度はどこに花嫁修行に行ってきたの?」

「一華ちゃんも久しぶりね! 今度は音楽部の方にお琴を習いに行ってきたの!」

この筋肉モリモリマッチョマンの淑女、助太刀研究会が暇があることをいい事、定期的に様々な部活に修行に出かける求道者である。

本人曰く花嫁修業との事だが、見かけるたびに何故か増える傷跡、そして鍛え上げられていく筋肉に武者修行としか思えないのは公然の秘密だ。

「それにしても久しぶりだな葛……より完璧な淑女に近づけたようだよ何よりだ」

「そんなお世辞はどうでもいいの草ちゃん。それよりもどうして教えてくれなかったのかしら?」

「お、おおそ、その事か! いやな、マイベスト・フレンド——佐野の事を紹介しなかったのは謝る。ただこれは葛の修行中に雑念を混じらせてしまうのもどうかと思っただな……」

嘘だ。本当は佐野の身を案じてである。

この葛という男、花嫁修業をしているだけあって結婚願望が非常に強い。そしてその対象は言うまでもないが異性ではなく同性である。

オレは佐野の生涯の友であるがゆえに、責任を持って佐野の貞操を

守らねばならないのだ……！！

「あらやだ、そうなの？」

「そうだともしうだとも！」

「そう……ごめんなさいね草ちゃん、貴方の気遣いを疑ってしまうなんて……」

幸いなことに。彼……いや、彼女は腕っぷしこそ強くてかなり性癖があれだとしても根は正直かつ単純だ。オレのその場しのぎの繕いでもどうにか信じてくれる。……オイ、一華はその白々しそうな目をやめろ。

「でもこんなに可愛い子だったら行ってくれればすぐにでも修行切り上げて会いに来たのに！ ああんもう、佐野ちゃん？と過ごせる時間ロスしちゃったわあ！」

お、おお珍しい……あの動じないクール佐野が後ずさってるぞ。

あんな態度で表す佐野は初めてみた……！！

佐野円堂 「そ、そう言えば。研究会はこれで全員？」

「ん？ ああそう言えば……まともに言っただけじゃなかったね、研究会メンバーの事」

「それもそうだったな……マイ・ベスト・フレンド、実はこの研究会メンバーは後一人居るんだ」

『あざみ』ちゃんねえ。あの子は中々に気まぐれな子よんっ」

アイツは研究会に誘って2つ返事で入会したは良いが、ある日を境にめつきり来なくなった飽きっぽい少女だ。

葛の奴がレアキャラだとするならば、あざみに至ってはウルトラスーパーレアと言ってもいいだろう。何せ、あいつは学校すら躊躇なくフケてしまう筋金入りの不良娘でもあるから。

「そうそうそれよりも！ 佐野ちゃんとお話してすっかり忘れちゃったけど……『目安箱』に依頼が入ってたわよ！」

「お、おおお！ 久々に依頼が来たのか！」

ばん、と我々が集まる机に載せられる1枚のルーズリーフ。

4つに折りたたまれたそれを、オレは待ちきれないとばかりに広げて皆に見せる。

そして集まった我々の視線に晒された『助太刀依頼』の内容は――

！

助太刀研究会の皆様へ

昨日、大切な手帳を学校のどこかになくしました。

黒革包装で、カバーの右下にネズミのマークが

書いてあります。

どうか人の目に触れる前に探し出してください。

よろしく願います。

1年B組 信楽ひな子より

「……3ヶ月ぶりの依頼だね。久しぶりな割にはまともな依頼内容」

「イタズラ目的の投書が多かったものねえ……とは言え、例えそうだと

してもちちゃんと目安箱くらい毎日確認しなさいよ、草ちゃん！」

「う……面目ない……というか何故オレが叱られる!?! 一華も連帯責

任！」

「確認はいつもオレがするーって言ってたのは草じゃなかったかな
?」

「くっ、そう言った記憶がない事もない……! わ、分かった。こうし

よう……今度からは研究会のメンバー全員が気がついたら確認する

事にしよう! 会長からのお願いです！」

【Tips】

旧校舎1階にある下駄箱に『目安箱』が設置

されています。その箱の中には助太刀依頼が

入っている事があるので、定期的に確認

しておきましょう。

「さて……我々助太刀研究会の初めての活動らしい活動の時間だ。今
回は落とし物捜索だからそんなに大掛かりじゃないが、依頼人は早め
の解決を望んでいる! みんなで手分けして探そうじゃないか」

「任せて頂戴！」

「まあ依頼が来たって言うのならやるしかないか」

佐野円堂 「分かったよ」

「この会話を切っ掛けに校舎裏の隅にアイテムが配置されます。速攻

で取りに行きましょう」

オレの一声と共に全員が潔く応じてくれる。非常に頼もしい事だ！

「さあてそれじゃあ今日中にはぱつと解決しちゃいますか！」

「それじゃあどの辺りを探しに行く？」

「そうねえ……旧校舎、っていうのはまず無いだろうから、新校舎中心に探す事になるだろうけれども……まずは依頼人に会って心当たりを聞かない事にはね」

「カズちゃんに賛成。まだその子が学校に残ってるかは不明だけど、この学校の中で手帳を1つ探し出すのは並大抵の苦労じゃないと思う」

「ごもつともだな。だとすればまずは依頼人に……んん？」

「佐野の姿がどこにもいないぞ？ 奴はどこに行つたんだ？」

「佐野君、またどこか行つちやつたんだ」

「あら本当。気が付いたら……もう探しに行つちやつたのかしら？」

「恐らくは。佐野君つてあの大人しそうな見た目に反して即断即決即実行な行動派だからね、いつも全力だよ」

「うむ。奴の一挙一投足は無駄がない！ 無駄な行動は一切しないし、会話も最低限に済ませる。まるで生き急いでいるかのようなひたむきさがマイ・ベスト・フレンドの尊敬出来る点だな！」

「あんなに可愛い顔をしてるのに、そうだったのね……でも大丈夫かしら？ 闇雲に探すだけじゃ見つかりっこないっていうのに」

「ふふふ……奴は不可能を可能にする男。手がかりが無くとも、既に心当たりがあるのかもしれないぞ！」

「何その無駄な信頼感。流星に佐野君でもそれは……」

一華も言葉を濁すけど、強く否定はしないという事はそうなるかとも思っているのだろう。

そりやそうだろうな。近くに居ればこそ分かる奴の有能さは、まさしく天性の物。数十分後には葛もその傾げた首を、ヘドバンの如く縦に振っている事だろう！

「と、噂をすればマイ・ベスト・フレンド！」

扉が全開になるのも待ちきれずに連続スライディングで研究会に入ってきた佐野。奴はオレめがけて瞬く間に間合いを詰めると、表情1つ変えずにあるモノを手渡してきた。

むう……これは！

「依頼人の手帳!?!」

「ぎ、流石はマイ・ベスト・フレンド……!! くう、これだからお前って奴は最高なんだ!」

佐野円堂 「少し大変だった」

聞けば佐野はこの短時間で直感に従って探し回って見つけたらしい。

最低でも2日はかかると思っていたこの依頼を初日で解決なんて……尋常じゃねえぜ!

「……素直に驚いた。中々に出来る事じゃないと思う」

「お、お、おお、おお、怖い! 凄いわ佐野ちゃん! ハグしていい? していいかしら!?!」

佐野円堂 「遠慮しておきます」

ヘドバンしながら近寄ろうとする葛からの確に距離を取る佐野!

奴の手柄は確実に我らメンバーの心を掴んだ事だろう。かくいうオレはもう心酔レベルだ! 何度でも惚れ直しちまうぜ!

「なにはともあれ佐野、助かったぜ。依頼人にはオレの方から伝えておく! ありがとうな!」

【Result】

依頼『落とし物①』解決!

クリア：+10

早期解決ボーナス：+5

単独解決：+5

『助太刀ポイント』を20獲得した!

【information】

助太刀ポイントを貯める事で、

様々な特典を得る事が出来ます。

依頼を沢山解決して、珍しいアイテムや

研究会の拡張、スキルの獲得を

目指して見ましょう！

【この日を境に研究会に依頼が舞い込むようになります。届いた依頼はさくさく攻略しましょう】

§ § §

そうしてオレ達研究会メンバーの本格的活動が始まった！

何故かぷつぷつりと途絶えていた助太刀依頼は葛が来た瞬間からじゃんじやか舞い込むようになってきていた。

——いや違うな。活発になった理由は間違いなく佐野のおかげだろう。

奴のおかげで我が研究会の依頼解決スピードは平均1〜2日、そして依頼解決率はまさかの100%！

依頼をすればたちどころに、かつ確実に解決する事から校内でも助太刀研究会の名前はぐんぐん浸透し、一躍有名になったのだ。

今では以前では考えられない程の依頼が大量に舞い込んでくるようになってきている！

それにしても驚くべきは佐野の解決力だろう。

投書される内容は『落とし物探し』のような物がある一方で『運動部の助っ人』や『勉強を教えてください』と変化球があれば、はたまた『ソシヤゲのレベル上げを頼む』と言った私利に走った物もあれば、『明日を晴れにしてくれ』という、何だこれ!? と目を疑う内容も多い。だが佐野はその全てをほぼ独力で、そして早期解決をことごとく成し遂げていくのだ！

「剣道なんて初めてやる上になんで私が大将に!?!」

佐野円堂 「紫華さん、僕が最初に全部倒しますので」

【Result】

依頼『ソードマスター②』解決！

『助太刀ポイント』を30獲得した！

「θ? E? Ω? 佐野ちゃん、何でこんなよくわからない記号の羅列に意味が分かるの!？」

佐野円堂 「真剣ゼミを履修しといて良かった……」

【Result】

依頼 『大学受験への道②』 解決！

『助太刀ポイント』を30獲得した！

「……ソシヤゲってこう、もつと華やかかと思っただけどアレだな。何か虚無だな」

佐野円堂 「ひたすら無心にボタンを押すのがコツだよ」

【Result】

依頼 『千里の道も一歩から①』 解決！

『助太刀ポイント』を20獲得した！

「草ちゃん。この依頼本気でどうするつもり? お天気キャスター呼んでくる?」

「むう……オレが気象予報士だったら何とかかなったんだが」

「その職業どっちも天候操作の力はないから。降水確率100%を変えるなんてそれこそ神様でもない無理だよ……この依頼は断るのが妥当」

「……一華、マイ・ベスト・フレンドは諦めてないようだぜ」

「? 佐野君、今更一体何をしようと……して……それってまさか!？」

佐野円堂 「てるてる坊主……」

【Result】

依頼 『明日天気になれ!』 解決！

『助太刀ポイント』を50獲得した！

「この依頼は予定日の前日までに10個てるてる坊主を作ると確定で

晴れます」

「……からつと晴れたね」

「……からつと晴れたわね」

「うおおおおおお、流石はマイ・ベスト・フレンド！　そこに痺れる、憧れるう!!」

それでも舞い込む処理が追いつかない程の大量の依頼の数々！

それはかつてオレが立てた理念に沿う事態ではあるが、研究会設立きつての異常事態でもあった。

しかしてその尽くを佐野がやっつけていくのだからもう我々は言葉も出ない。

日に日に上昇していく研究会の評判。

充実していく部屋の設備の数々。

そして止まることのない学校内外からの依頼の数々——気が付けば佐野が入会して二ヶ月も経たぬうちに、この研究会は佐野を中心として活動をするような形になっていた。

「佐野君。あんまり根を詰めすぎないようにね、あ。これ依頼の一覧。分かる範囲で難易度のランクをつけておいたから」

佐野円堂 「ありがとう紫華さん」

「佐野ちゃあん、私の花嫁修業仲間からの依頼があるんだけど、この依頼を受けてくれないかしら？」

佐野円堂 「構わないよ」

一華も葛も、そんな積極的かつ献身的な佐野の行動にあてられたのか毎日研究会に顔を出してくるようになり、時に佐野を頼り、時に佐野を助けるように努め始めたし。

そればかりではなく、研究会で過ごす時間が増えた事で、プライベートでも共に過ごす時間が格段に増えていた！

「はっはあぁー！　このコーナリングはどうだ——あががががが!？」

一華、やめろお！　味方をショットしてどうする味方をー！

「ごめん。目の前でうろちよろしてうざくてつい癖で」

「佐野ちゃあああん、私達これじゃあ負けちゃうわあぁー！」

佐野円堂 「お願いだから抱きつくのは辞めて」
放課後、外が暗くなるまで研究会備え付けの古いゲーム機で白熱したり。

「どうどううるるアアアアツ!! ストライクじゃあああいつ」

「かずちゃん漢^{オトコ}。漢^{オトコ}出ちやつてるよ」

「で、出たー! 葛の空飛ぶ魔球! 超低空でボーリングの玉を飛ばす滑走方法! その破壊力からボーリング上の出禁リスクもある荒業だああーツ!!」

佐野円堂 「流石にあれば出来ないな……」

休日、町を紹介がてらボーリング場で遊んだり。

佐野円堂 「どうぞ、何も無いつまらない部屋だけど」

「おお、ここがマイ・ベスト・フレンドの家……! 思ったとおりメチャクチャ整理整頓されてるな!」

「……へえ。ここが佐野君の家なんだ」

「すうくくくはああくくくすううくくくつ、佐野ちゃんのスメル……芳^{かぐわ}しいわあ」

「葛ア! 自重しろ葛ア!」

お互いの家にお邪魔して、助太刀依頼について馬鹿話をしながら話し合ったりした。

それは以前と比べれば格段に慌ただしく忙しい日々であることは間違いない。だけどこの春から始まった毎日は決して退屈でも苦痛でもなく、ただただ笑いとわくわくに溢れた日々である事もまた間違いではなかった!

オレ自身が発足した研究会、その中心が佐野になった事や、相変わらずオレと二人だけだと誘いを全て断って来る事などもう些細な事だ。

皆とこうして笑いあう日々がいつぞやにプレイしたオレの憧れを詰め込んだ青春恋愛ゲーのよう。そんな憧れを追体験しているようにで何に増しても嬉しくて仕方がなかった。

そんな忙しくも充実した日々を過ごしていったとある日の事だ。
オレはある出来事に出くわしてしまう。

「……ふふ。キミって真顔でそんな面白い事を言うんだ」

それはオレがテストの補修で居残りをした帰りの事だ。

夕方と夜の境目、いわゆる逢魔が時に学校から帰ろうとする佐野と一華の二人の姿を見かけた。

同じく帰宅しようと考えていたオレである。見かけたのなら輪の中に颯爽と混ざろうとしたのだが……気が付けば、オレはその足を止めていた。

何でだろうか、特に大きな理由はなかったが……その時、オレはあの場に行つてはいけないような気がしたんだ。

「いい加減タメ口でいいって？ 十分にタメ口な気がするけどね……何か遠慮があるって、いや、草はほら。雑草だからあんな感じに接してるのであってさ」

「まだ距離を感じて仕方がないって……だってほら、キミっていつも頑張ってるじゃない？ 私はただでさえ口悪いから佐野君を傷付けちゃうのはどうかと思って」

「傷なんて付かないって？ 嘘。本当に無敵の人なんてどこにも居ないって私は知ってる。如何にキミが完璧超人でも限度がない訳がないのさ。それこそロボットでもない限りね」

「はあ……呆れた。試しに罵倒してみてくださいって本当、どういうお願い？ 仮にも友達にするような内容じゃないよ、変態なの？ バーカバーカ。……あ」

「……くつ、無性に負けた気がする……せめてその澄まし顔はやめろっ！」

いつもむつつりとした顔を変えない一華が見せた喜怒哀楽の表情。そこに嫌がったりする様子は全く見られない。

それを当然のように受け止める佐野の顔はやはり無表情だ。

……研究会のメンバー同士が仲睦まじくなるのは素晴らしい事だ。

佐野という素晴らしい人物とはオレと同じように、一華も葛も深い関係になって貰いたいとは思っているし、佐野の手腕にかかればどんな相手でもたちどころに親友になるのもおかしくはないだろう。

——
だけど

「はあ……はいはい、今後も頼りにしてるよ。円堂君」

佐野円堂 「任せてよ一華」

この短期間で進みすぎた二人の仲に。

どうしてだろう、オレは小さな胸の痛みを覚えて仕方がなかった。

【これで現時点の一華の好感度はほぼMAXです。一華含む女性ヒロインはキーイベントをこなすことで絆MAXになりますので。あとは夏のイベント待ちですね。】

夏

季節は春を過ぎ、初夏に差し掛かろうとしていた。

肌寒さが抜けきった外気の中、早くも半袖になった野球男児達がオッスオッスと掛け声を挙げているのが聞こえる。

もちろん我々助太刀研究会の活動も彼らに負けることはなく、春より一層忙しい日々を送っていた！

【Result】

依頼『超難問クイズを制覇せよ！①』解決！

『助太刀ポイント』を20獲得した！

【Result】

依頼『10円おじさんの謎を探れ』解決！

『助太刀ポイント』を40獲得した！

【Result】

依頼『赤茶けた柱』解決！

『助太刀ポイント』を30獲得した！

【Result】

依頼『見た目が10割!?』解決！

『助太刀ポイント』を10獲得した！

佐野円堂 「依頼解決しに外に行ってきます」

「あつちよつと円堂君！ ……はあ、もう居ないだなんて。呆れを通り越して何も言えないよ」

「本当よねえ、アタシ達が言うまでもなく解決していくから……頼りになりすぎちゃうわ」

「貴様ら、マイ・ベスト・フレンドの力に依存しすぎているぞ！ 頼りになるのは分かるがオレ達も活動をだなあ!？」

「草だって私達と一緒にお茶飲んでるじゃないか」

「そうよそうよ。それにこの固焼き濡れ煎餅も佐野ちゃんからの差し入れよ。一番食べてるあなたが率先的に行動しなきゃ駄目じゃないの草ちゃん」

「くっ、お、オレはこの煎餅を食べ終えたら手伝うつもりだったんだ！

舐めるなよ！」

「噛んで食べてるよ」

我々……というのは語弊があるだろう。そう、この助太刀研究会で目まぐるしく動いているのは実は佐野一人だけだ。

我々がこうして休憩時間にぼりぼりと煎餅を貪り食ってる間も、奴はさながらマグロのように留まることなく依頼をこなしていく。

そして奴の尽力のお陰で我々研究会の名は学校内で知らぬものはない、というレベルまで上昇し、学校からの備品提供や、依頼者の感謝の品で部室も以前とは比ではないくらいに充実している。

マッサージチェアに筋トレ機材、4kテレビに最新型ゲーム機、プロジェクターまで配備されている部室などまずないだろう！

「それにね草ちゃん。私達だって手伝いたいのはやまやまなのよ？

でも彼っいたら依頼を受けたと思ったら次の瞬間に解決してることが多いから……」

「手伝う間もないって感じなんだよね。でもそれは決して一人よがりって訳じゃない。円堂君が無駄なく準備した結果手伝う必要がなくなっただって感じだから……何というか、ね」

「だから私達が出来る事と言えば彼が倒れそうにならないように休憩を薦めたり、差し入れするくらいね。気が付くと倒れそうになってるから……」

奴は最初嫌いな物はないと言ってはいたが、そんな奴が嫌う物があるとすれば間違いなく『無駄』であろう。

どんな物事にも兎に角スピードを求め、早期解決を求む。

言葉は最低限に。行動もまた最小限に。少しでもスキップ出来るものがすぐにそれに飛びつく。

そしてその無駄のなさ故、我々が手伝うスキが全く生まれぬ。

唯一口を出せる事があるとすれば、依頼をこなしながらも我々とのコミュニケーション(オレは最近避けられているが!)、自己鍛錬も欠かさないといい明らかかなオーバーワークくらいか。

全く、奴はRリアルタイムアタックT Aでもしているつもりなのだろうか? 一所懸命に活動してくれる事は素晴らしいが、それで草が体調を崩して貰っては困る! 我々は硬い絆で結ばれたベストチームなのだ! だからこそ助け合わねばならないだろう!

「あ。ねえねえ。それだったら円堂君の慰労会いろうかいでもするのはどうかな?」

「それ……いいわね、ナイスだわ一華ちゃん!」

「おお慰労会か!」

なるほど。頑張り屋の奴のために労いの会を入れるというのも悪くはないな!

我々も感謝の気持ちを改めて伝えられるし、奴も休める。そして今以上に我々の絆も深まる! まさしく全員が得する素晴らしい展開だ! やるな一華!

「で、あるならやっぱりサプライズにしておきたいわね」

「うーん、でも勘がいい円堂君の事だからすぐに気がついてしまわなかな?」

「オレには素晴らしい案があるぞ。聞きたいか聞きたいだろう! 奴のために我々で千羽鶴を!」

「素敵な案だね。他人の昨日見た夢の話聞くほうがまだ建設的だったよ」

「あ。だったら匿名の依頼を出すのはいかがしら? 佐野ちゃんも依頼だったら飛びつくだろうし!」

「ほむほむ。そして最終的にはこの部室に誘導して〜って感じ?」

「良いわねソレ」

「オレの案も悪くないと思ったが……なるほど、それも良いな!」

「それで色とりどりのお菓子とか、ジュースとか……あとは、私とITCHーと葛ちゃん、水着でも着て思いっきりサービスしちゃう?」

「しちゃう〜?」

「草、死ねとまでは言わないから切腹しろ」

「実質死じゃないか!? とうか今のはオレの発言じゃない!」

我々の秘密会議に唐突に混じったパリピ陽キャの声! 全員の顔がその声の主に向けられれば、そこには眩しいほどの金髪をポニーテールにしてまとめた、どこか小悪魔的な美少女がいたではないか! 「やほやほく、久しぶり。みんな元気してた?」

「あざみ!」

「あざみちゃん!」

「瑠璃玉……さん」

コイツの名は『瑠璃玉あざみ』、我が助太刀研究会の部員ながらも、設立以来数えるほどしか来なかった幽霊部員! なおしよつちゆう学校をサボるため研究会どころか学校でも出会えるのが稀まれなレアキャラでもある! その見た目のギャルギャルしさと行動から不良と呼ばれているものの、珠玉しゆぎよくのルックスと出るとこの出たスタイルから男女問わず人気があるのだ!

「よく来たな、珍しいじゃないか!」

「だよね。ほぼほぼ半年ぶり? ごめんね、顔出せなくて! 私も色々忙しくってさ」

「忙しいって……貴方はただ遊んでるだけじゃないかな?」

「バレた?」

「一華ちゃん! もう、折角来てくれたんだから角が立つような事は言わないの」

「……」

「やーい、怒られてやんの」

「やめて」

デコられたネイルで一華の頬をつつくあざみ。

いつも以上に険しい顔をする一華の反応で分かるだろうが、奴は何故かあざみを嫌っている。しかし一方のあざみは一華を嫌ってはおらず、面白がってむしろ積極的にからかおうとするのだから変な関係だと言えよう!

「で。どうしたんだ? ああそうか、貴様もまたオレ達の活躍を聞い

て復帰したくなつたというのか!? それならば大歓迎だ! 共に真なる友情を築いていこうではないか!!」

「うんうんそんな感じ。いや、本当快適になっちゃったねこの部屋! 見てびっくりしたけど何この大画面モニター! 音響もガチじゃん! うわは、リクライニングマツサージチエアもあるし、あのクーラーだつてつい最近出たばかりの奴でしょ? 冷暖房完備! すごい! 住めるじゃん! あ、この椅子今度から私の特等席にしたい?」

「おお、うなず頷いてくれた! 絢爛豪華けんらんになつた我らが部室を見て驚くのも致し方がないというものだな! ただそのマツサージチエアは部員全員のものだから特等席という事には……うん? なんか怒つてないか一華?

「瑠璃玉さん、貴方は別に活動したい訳じゃなくて体よくサボるためにこの部室を使いたいだけでしょ? そう言うのが一番困るんだけどね」

「一華ちゃん!」

「え、なににに邪推しすぎだよイチ? 私、みんなの活躍をまた聞きして感動しちゃつて。それでまたみんなと活動したいな、つて思っただけだよ。ほんとほんと」

「そんな呼び方しないで。片手の指で数える程しか研究会に来てないのに、良くぞまあそんな薄っぺらい事が言えるね」

「今度は心入れ替えたから、ほんとほんと! あ、ごめんちよつとMINE返すからこの話後でいい?」

「……っ! この!」

「一華!」

思わず手が出そうになつた一華をどうにかして抑える。

全く、なんで一華はあざみを邪険にするのか! あざみも面白がつて挑発しないで欲しいぞ!

お陰で一瞬にして険悪ムードに変わってしまったじゃないか!

全くどうしたものか……ん? この特徴的な連続で床を擦る音……こ、コイツは!

【Result】

依頼『ムハジャキントウントウクのお告げ』解決！

『助太刀ポイント』を50獲得した！

佐野円堂 「ただいま。……どちら様？」

やはりマイ・ベスト・フレンドか！

スライディングで滑り込むようにして部室に入った奴は、あざみの姿を見つけると首を傾げた！

「佐野ちゃんお帰りなさい！ この子はね。前ちらつと言ってたかもしれないけど……」

「よっすよっす、瑠璃玉あざみちゃんだよ。君が噂に聞く大文字高校の『スピードオブスピード』？ 元幽霊部員だけど、これから心を変えて一緒に活動してくからよろしくね」

「よろしくなくていいよ、そんな奴」

○……どうして一華が不機嫌？

●普通に挨拶する。

佐野円堂 「よろしくね瑠璃玉さん」

【下の選択肢を選ぶとあざみの好感度が上がり、一華の好感度が下がります。が、一華は既に絆MAX状態なので下がっても問題ありません】

「おおつ、素直でいい子だね、私的にもポイント高いよ？ うりうり」

「……っ！」

「コラアあざみ！ 初対面のマイ・ベスト・フレンドにそんな馴れ馴れしくっ！」

「あざみちゃん、貴方女の子だからそんなに佐野ちゃんにくつつかないの。はしたないわよっ」

「おつと怒られちゃったかく、って何か草君の怒りどころ違うくない？」

何も違うところなどない！ 全く、知り合っただけの相手にそこまで距離を詰めるパリピムーブは尊敬に値するが、汗と涙と血をもって交友を深めた佐野にべたべたするのはオレの目が光っている

間は許さんぞ！ 隣の一華もきつとオレと同じ気持ちだろう！

「まあいつかく。でき。でき。でき。私キミの事が凄い気になるんだよね。この研究会がここまで大きくなったのってキミのお陰なんですよ？ 学校一の俊足しゅんそくの持ち主で、一日10件以上の依頼をこなしたり、貰った依頼をその場で解決したり、10円おじさんを討伐したり、教頭先生のヅラを暴いたり、食堂の裏大食いメニューを制覇したり、助っ人野球で全打席ホームラン決めたり、学年テストで1位を取ったり、小説コンテストで大賞を受賞したり、コンビニ強盗を退治したり、懸賞で4k巨大TVを当てたりと、本当どれだけ偉業があるのやら……」

「手に入れた称号の数だけこのセリフは長くなります。仕方ないね。ちなみに現時点で取得している称号は『スピードオブスピード』『依頼マイスター』『辻切り解決魔』『10円おじさんキラー』『ハゲは隠すものじゃない』『極食漢』『サヨナラホーム男』『学年一位の秀才』『令和生まれの大文豪』『ユアヒーロー』『豪運の持ち主』です。」

佐野円堂 「過大評価だよ」

「いやいやいや。こんだけやつといて過大も何もないでしょ。それだけやってたらこの学校で最早君を知らない人なんていないさ、いよつ、『伝説のスーパー転校生』君！」

【称号】

『伝説のスーパー転校生』を獲得した。

全ステータスに+20の補正！

更に全アクションの好感度+5！

【本RTAのラスト称号②です。これがあるとより攻略が捗ります。これは本来なら周回しないと手に入らない裏称号です】

「伝説のスーパー転校生……だとー！」

「何その変な異名……何？」

「あれ？ みんな知らなかったの？ 彼つてば全校生徒からそう呼ばれてるんだよ？」

くつ、そんな羨ましい通り名がついてるなんて……！ だが他でもない佐野がその名を貰えるのは納得いく話であるし、また親友として

も誇らしいな!

「ま、そんな伝説のスーパー転校生君とは是非ぜひ色々な話を……え? ちよつ、佐野君どこに消えた? 今までそこに居たよね?」

「円堂君ならもう教室を出ていったよ」

「佐野ちゃんは相変わらず止まらないわね……なになに、次の彼の依頼は——『筐体きょうたいに居座り続けるゲームセンターの四天王を倒して欲しい』ですって?」

「奴であるならばその程度の依頼造作もないな。お茶でも飲んでるか……」

「そうね」

「そうしましょうか」

「ええーいつもそんな感じなの? どうせなら見に行こうよ。彼の活躍っぷり気になるでしょ?」

正直我々は佐野の活躍なら普段見ているので、今回の依頼についても絶対に成功するだろうなという信頼があるのだが……ふむ。そうだな! ここはマイ・ベスト・フレンド初心者のあざみの驚く姿を見るというのもまた一興だろう!

葛も一華も同じ思いだったらしく、ほどなくして全員でゲームセンターに行く事になった。

そしてところ代わって夕焼け赤らむ商店街の一角。

創業30年以上、歴史ある古びた大文字町唯一のゲームセンター『イリュージョン』。

店の中に入り込むと様々な光と大騒音が我々を迎え、その騒音の中、ほどなくしてひときわ目立つ人だかりの山を見つける事が出来た。あれは……!」

「くうつ……!! ば、馬鹿なこのオレの悪男ワルオトコが一度も触れる事なく……!」

「カ、カムイたん……!」

「我が黒面の物をあんなに呆気なく……貴様、一体何者だあああああッ!」

「おおうやってるやってる。 アルカナフレイブギアーズ A B Gかー。 ってランク『極』の奴

ら相手にP勝ち？ やるじゃん〜っ」

対戦格闘ゲームの筐体の周りには佐野とそのギャラリィ達がいた！ そして思った通りマイ・ベスト・フレンドは勝ち進んでいたようだ。

ふっ、まあ当然だな！ 奴であるならばどんなジャンルのどんな相手であろうと、顔色一つ変えずに勝利をもぎ取る事など造作ない事なのだから！

「どうーっふっふっふ。多少はやるようですなあ……だが今まで倒したのは私より遥かに格下。チミには格の違いというのを教えてあげましょう！」

しかし今度は佐野が座るゲーム機の向かい側に、全体的に体面積の大きいドラム缶のような巨体の主が現れる。まるで洗っていない生乾きのシャツのような臭いを振りまく奴は、まさしくこのゲームセンタ―の大ボスといった風格！ マイ・ベスト・フレンド……油断するなよ!?

「……何なの。ゲームって極めると盤外攻撃までしてくるのかい？

臭い……」

「何だか洗ってない犬みたいな香りするわねえ……」

「このゲーセン特有の香りってほんつとあれだよね〜」

「うぎいいいいい〜っ、その精神攻撃をやめろオ！」

「き、ききき貴様ら口プレイは禁止ですぞ!!」

「何故拙者どもにも巻き添えで攻撃するのでござるか!？」

何やらオーデイエンスも盛り上がっている中、佐野とゲーセンのボスとの鬪いが今まさに始まろうとしている！

佐野が選んでいた葉っぱ一枚だけ装備した原始人に対し、ボスを選んだのはちびっこ魔法少女！ 見た目は確かに可愛らしいが、そんなので佐野のキャラに勝てるのか!?

「いや〜。でもあのキャラはかなり強いよ〜。使いこなすのは大変だけど、何よりあの佐野君のキャラに7:3で相当有利取れるからね」
「詳しいのねあざみちゃん！」

「まあね〜。私もこのゲームは家庭版でも結構やってるし〜」

「ふんっ！ だから何だと言うのだ！ ありとあらゆる分野に精通し、その道でトップをひた走るマイ・ベスト・フレンドに不可能など……な!? お、おいどうしたというんだマイ・ベスト・フレンド!」
その光景にはあざみを除いた全員が驚いた!

なんとあの佐野が……佐野が一方的にやられ続けているというのだ!

敵ボスが操る魔法少女の多種多様な攻撃の前にすべて無防備どころか、レバーやボタンを一切動かさずにただ眺めているばかり!ば、馬鹿な!

「どうおーっふおっふおっふおっ!! 弱い、弱すぎですなあ! 他の者共を倒せても、所詮私には勝てないという事がよく分かりましたかなあ?」

「この戦闘はあざみ入部時専用の負けイベです。倒す直前までねばっても唐突にガード不能即死が飛んでくるので迅速に負けましょう」

「円堂君!」

「嘘……佐野ちゃんが負けるなんて!」

蓋を開けてみればまさかまさかのストレート負け……!

あの佐野が相手に傷一つ負わせる事なく負けてしまうなんて……くそっ、なんて奴だ!

だ、だがな! たとえ佐野が負けでもオレがいる……! 佐野、貴様の雪辱は絶対に晴らしてやるからな!

「まあまあコイン投入は待ちなっつゝ。アイツはランク『至極』。さっきの3人組よりも強い奴だよ。勝てるわけないって」

「何が至極だオ●ホみたいな名前しやがって! 勝てる勝てないじゃない、勝つんだ!」

「根性論はいいからちよつとどいてなっつゝ? まだ私の方が勝率あるからさゝ」

「おほお? まあだ身の程を知らぬものが挑んで来たのですか? 無駄だというのが分からないのですかねえ。ま、ハンデなどくれてやりませんが」

いつもの間延びするような声でオレの代わりに座ったあざみは、何

も気負う事なく手なれた手つきでスティックとボタンを操り、あつという間に対戦を初めてしまう。

確かに、かなりこのゲームに対して慣れてきているようだ。だがな奴は佐野が勝てなかった相手！ あざみに勝てるとは……な、なあ!?

「ほいほいほいと、はい勝利ー!! いえーい、あざみちゃんの勝ちっ!」

「ぷ、ぷぎいいいいいいいいいい!!」

あれだけ押されていた筈のあざみ操る警察コースのキャラは絶体絶命のタイミングで逆転勝利。

動揺を隠せぬボスが2R目から挽回をたくらむものの、結局はあざみのワンサイドゲームで終わってしまった……あざみ、お前このゲームをやりこんでいたな!?

「いえーいみんな見てた? いえーいいえーい!」

「凄い、凄いじゃないのあざみちゃんっ!」

「まさか円堂君が勝てなかった相手に勝つなんてね……」

佐野円堂 「凄いや」

【Result】

依頼 『四天王を超えし者』 解決!

『助太刀ポイント』を10獲得した!

「ふふーん、見直した? 佐野っちも凄かったよ極相手にあれだけ動けるのは中々ないね! 良ければお姉さんが鍛えてあげよっか?」

「佐野っちって……はあ、こんなの聞く必要ないわよ円堂君。依頼達成したし帰りましょう?」

あざみめ、よりにもよってマイ・ベスト・フレンドにそんな上から目線で! いや、確かに奴に勝てなかったマイ・ベスト・フレンドがあざみに勝てる道理はないが、佐野がそんな教えを乞うなど!

●教えを乞う。

○教えを乞わない。

佐野円堂 「教えてくれるなら是非」

「上を選ぶとあざみとの追加ミニゲームが遊べるようになります。一日一回挑戦できて、超反応クソ強あざみ相手に勝利するのが最終目的ですが、勝てなくても10回以上通うとクリア扱いになります。通つてられないので速攻で勝利します」

「ほいほい〜じやあ明日暇だし〜明日やろつか……あ。あとそのゲーセン軍団。ゲームは譲り合つてプレイするように。なかなか強かつたよんっ、ばいばーい」

「……え。え、ええ……分かりましたよ」

呆然としているゲーセンのボスを置いてこの場を後にするあざみ。しかし呆然とするのはこちらと同じだ。

普段を知る者にとっては到底信じられない佐野の敗北。

そしてその佐野を上回るあざみ——奴にも苦手分野があつたという事なのだろうか。

「あざみちゃんにあんな才能があつたなんて……」

「まさか円堂君より強い人がいるなんて……信じられない」

「……」

信じられない。確かにそうだ。

そもそも佐野はどうしてあのボスに何一つ反撃出来なかつたのだろうか？

相手の強さを悟って無駄な抵抗はしなかつた？ それとも体調不良なのか？ あるいは……あざみが乱入するのを待っていたというのか？

理由こそ分らないが、どうにもその部分がオレの喉元に引っ掛かり続けていたのだった。

§ § §

「やつほく、また来たよく、お邪魔く」

「あらいらっしやいあざみちゃん」

「あざみ貴様……！ 遅いぞ！」

「……はあ」

佐野円堂 「いらっしやい」

そしてゲームセンターの件から四日後の事。あざみはふらりと研究室に顔を出した！

奴の猫のような気紛れと適当さ加減は知っていたが……まさか約束をほっぽり出すとはな！ それもよりにもよって佐野との約束を！

「ええ〜？ 佐野っちと約束なんてしてたっけ〜？」

「してただろう！ 貴様がマイ・ベストフレンドに訓練をつけると！」「訓練？ ……あぁ〜っ、ゲーセンのね。思い出した思い出した。そうそう佐野っち凄いゲームの筋良かったもんね〜」

こいつは佐野ほどとは言わないが昔から要領がよく、どんな物でも平均以上……いやトップクラスの腕前を見せる才能があるのは知っていた。だがこの上から目線の発言と来たら！ 思わず怒鳴り散らしそうになる！

確かにあの時は貴様の方が上だったが、佐野とて才能の塊！ 訓練すれば貴様の喉元などに食い破る一匹の龍となるだろう！ せいぜい今はいい気になっていればよい！

「そんな約束すら守れない、適当な奴に教わる必要なんてないよ円堂君」

「厳しいなくイッチー。いやごめんて〜、ちよい用事が多すぎてさ〜、マジだるだるだったんだよ〜。もうスマホが鳴りっぱなしでね〜、いや〜人気者はつらいですな〜」

「あなたねえ……っ！」

「ハイハイー華ちゃんクールダウンしましよ。それで？」

「うん。今なら暇だし出来るよ〜、どうするやっちやう？」

○今はちよつと……。

●お願いします。

佐野円堂 「是非」

「んじゃあやりますか〜。ABGSはアケと家庭版じゃ地味に違うから本当はゲーセンでやるのがいいんだけど、佐野っち筋良さそうだし問題ないっしょ」

「お、おおおおおおお、流石マイ・ベスト・フレンド！ やはり前は調子が悪かったのか！ ドツキリさせてくれる！」

「……」

「ちよ、ちよつと、あざみちゃん……あざみちゃん？」

「この子のこんな姿初めてみた……ぷぷっ」

「——うがああああ……ツツ!! 今のはなし！ なし！ もう一回！ もう一回佐野君!?! ……何でいないの!?!」

「遅かったな。もうマイ・ベスト・フレンドは依頼に出かけたぞ！」

「あの子は事が終わったらさっさと次の事をしたがるのよねえ……あざみちゃんも覚えていた方がいいわ」

「く、く、くううう……っ!! そんなの認められない！ どこ!?! どこ行つたの!?!」

「諦めた方がいいと思うけど。円堂君の才能は間違いなく貴方以上だろうから。それじゃ、私たちも依頼をこなしていこうか」

ふはははは！ やはり佐野はオレの、いや。オレらが見込んだ男だった！

あざみすらも手玉に取るその手腕、まさしく末恐ろしい！ しかしながら敵なし！ 天晴だ！ あっぱれ この結末にはさしもの一華も思わずニッコニコだぞ！

「絶対に、絶対に負かす！ 負かしてやるから……っ!!」

§ § §

「佐野つちもう一回！ もう一回A B Gやろう!?! 今度は負けないからさあ……っ!!」

佐野円堂 「ごめん。依頼があるから」

「ちよつと……、またあ……!!?」

「ちよつとも何も無いでしょ瑠璃玉さん。円堂君は忙しいんだから」

【あざみとのミニゲームに勝つと、あざみが向こうから寄ってくるようになります。これはあざみに負けるまで続きます】

例の依頼以降、あざみの様子が変わった。

今まで奴が負ける姿を見た事がなかったため知る由もなかったが、
どうやらあざみは極度の負けず嫌いだっただけらしい。

自信があつたゲームでコテンパンに負けた結果、普段の飄々とし
た雰囲気はどこ吹く風。食い気味に佐野へと勝負を持ち掛け始めた
のだった。

「佐野っち今度こそ見つけたくくっ！　ちようど依頼終わった所だ
よね!?　じゃあ来てきて！　コテンパンにしてあげるから！」

佐野円堂 「しようがないなあ」

「挑戦を断り続けると強制イベントになります、この強制イベントで
毎回勝ち続けていくと大幅にあざみの好感度があがり、また本チャー
トで一番超重要なアイテムが手に入ります」

「あんなムキになつてゐるあざみちゃんなんて初めて見るわねえ……」

「あざみ、マイ・ベスト・フレンドに勝つのは極めて難しいと言わざる
を得ないぞー！」

「やってみなきゃ分からないじゃないのっ、挑戦すら諦めた弱者は指
でも咥くわえてろっ！　……ちよ、は!?　何その先読み技術！　置きコマ
投げなんてどういう判断で……あ、あああああああ——っ?！」

佐野円堂 「対戦ありがとうございます」

「あざみはパターン化すると簡単に倒せます。1ゲーム10秒以内に
倒しましょう」

しかし当然と言うべきか佐野は負けない。

あのときの不調が嘘だったように油断も手を抜くこともせず、常に
パーフェクトかつ最速であざみを下していく。

何度挑戦しようかと判子を押したかのような結果になったため、あざ
みはとうとう格闘ゲームでの挑戦を辞めていた。

「佐野っちっ！　次はトランプ!!　トランプで勝負!!」

その代わりに別のゲームで挑戦し始めた。

意気込みこそ買うが、佐野の奴がトランプで負けたことも一度たり
とも見たことはない。

あざみが勝つのは難しいのではないだろうか。

「♠の8のフォーカード!!　どうだ佐野っち!!」

佐野円堂 「ロイヤルストレートフラッシュ。対戦ありがとうございます
ございました」

「はあああああああ〜〜〜っ!!? ふざけんなく〜〜っ!!」

「す〜……円堂君たらまたロイヤル? 勝てる気がしないよ」

「あざみちゃんも十分強いんだと思うけどねえ……佐野ちゃんはやつ
ぱり凄いわ」

「あざみ、分かっただろう。マイ・ベスト・フレンドに勝とうとするの
は至難の業だという事が。それこそ、ヘソで茶を沸かすくらいには
な」

「草、それ誤用だからね言っとくけど」

「まだ私はあきらめてないから! 次はこの大富豪で……!」

佐野円堂 「8切りしてエース3枚。対ありでした」

「うがあああああ!!? つ、次っ! 次はジジ抜き!」

佐野円堂 「一抜け。対あり」

「お〜お〜お〜お!!? つ、次は七並べで……!」

……

……

……

……

…

「二人ともー、私達もう帰るわよー?」

「あと一回! あーとーいーつかいっ! ねえやろっ、勝ったらこれ
あげるからやろっ!? 次は絶対負けないからっ!」

佐野円堂 「えー」

【アイテム】

『金色のネックレス』を獲得した!

さつきまであざみが付けてた

オシャレできんきらのネックレスだ。

まだほのかに暖かい……。

「……凄いわね。あざみちゃんも全部が全部相当上手い筈なのに、佐
野ちゃんと来たらその上を全て言ってるわぁん……」

「真に凄いのは瑠璃玉さんに思えてきた……今の今まで連戦連敗の筈なのに、まだ萎えずに立ち向かおうとするバイタリティはある意味尊敬……」

あざみが我が研究会の一員として復帰してから既に一週間が経とうとするが、奴の負けず嫌いは筋金入りのようだ。毎日のように様々なゲームで挑戦しては佐野に完敗、それを繰り返す。

流星にしつこく挑戦をしすぎて佐野も難色を示しているが、「じゃあこれあげる！ これあげるから！」と普段はその美貌びぼうとスタイルで貢がれる側のあざみが、逆に貢いで繋ぎとめる程だ。

あまり健全でない一幕であるが、佐野の奴がそれを認めているならオレ達から何も言う事はない。

「あざみとの対戦は基本的に難易度が高いのでクリア時の報酬も高めです。連戦するたびに報酬も上がっていくので、金策はあざみ戦で基本的にいきます」

「おっ、この！ この積みが出来れば……ちよ、待って起爆早すぎっ、まだ私積んでる最中。あつ、あああ~~~~っ!!」

佐野円堂 「対あり」

「……」

「……何をむすつとしてるんだ一華よ。……ははくん」

「……何。そのしたり顔。別に何でもないから」

「いや、分かる。わかるぞ一華よ。愛しのマイ・ベスト・フレンドがあざみに取られて寂しいんだ——グボオッ!? ゲツホ!? ストマツクツ、マイストマツクペインツ！ ドントハートミーツ!!」

「お前と一緒にするな！ 別にそんな事ないっ！」

「ぼ、暴力は雄弁に語るぞ……っ、とりあえずその腕を下げろ……下げてくださいお願いしますっ」

一華よ、貴様の事はよく知っているがすぐに口と物理暴力に頼ろうとする姿勢はよくないぞ！ まあ今のところ暴力を振るう相手はオレにだけだから良しとするが……いや、良くないが！

「オレも同じ気持ちだ。奴との密なコミュニケーションを取れずには早2か月……オレの心も飢えている！ 相変わらず二人きりは避け続

けられているが……オレは諦めてないぞ！」

「言動の節々から感じる気味の悪さが、二人きりを避けられる理由だ
と思うんだけど」

「どこが気味が悪いというんだどこが!? オレと佐野との真の友情の
中に邪な気持よこしまちなど何も無いぞ! ……それで実際のところどうな
んだ」

「なにが」

「最近の貴様はしかめっ面が多い。さっきのは冗談だが、何か悩みが
あるなら聞くぞ」

「……」

佐野とあぎみの二人を眺めていた一華は、ひとつため息をついて研
究会から離れると、学校を去ろうとする。オレが負けじと奴について
いけば、観念したのかぼつり、ぼつりと語りだした。

「……一員みたいな顔して研究会に居る瑠璃玉さんが気に入らないだ
け」

こちらに顔を向ける事なく、奴は零こぼしていく。

「去年。覚えてるよね、あいつはこの研究会に片手の指の数ほどしか
顔を出さなかった」

「顔を出さなかった理由は何って聞いたたら『ごめん忘れてた』……あの
子の理由はいつもそれだった。呆れて物も言えない」

「草はそれを許容してるようだけどね、私は許せなかった」

「だって草がこの研究会に全力を注いでいたのに。事あるごとにサ
ボって、サボって……大事な時にあの子が居た試しがなかった」

「今もそう。あの子の目的は研究会じゃなくて円堂君。あの子に勝つ
事だけ」

「草の本気で学校を良くしたいという目的なんて、見向きもしてない
……円堂君がいろいろから放置はしてるけど、正直この研究会を
出禁にしたいのが本音だよ」

拳を握りしめ、怒りを眼に宿して語る一華に。オレの心が揺れ動い
た。

そうだ。去年発足したこの研究会は、実はサボり場のために作った

のではない。

本気で学校を良くするためにオレが立ち上げた物だった。ただし『生徒一人一人の自主性を』とかそういう綺麗なことが目的ではない。

オレの大好きな学園物ギャルゲーにあやかって『キラキラな青春生活を送れるような場所を作りたい!』という思いで作ったのだ。(ちなみにこの事は誰にも話してない!)

動機こそ最悪かもしれない、だが俺は本気でそれを実現させようと熱意に燃えていた! そして活動の一環として様々な依頼を受けて学園生活の向上を目指したものだだったが……。

結論から言えば、破綻した。

当時のメンバーはオレと一華と葛、そしてあざみだけ。

そんなオレたちの草の根レベルの活動は周りに全く響かず、費やした努力のほとんどは全てが空回り。

生徒も先生も、そんなオレ達を笑い、ただ小ばかにするだけだった。^{あこが}憧れていた学園生活は遥か遠くに。

挫折と苦渋しか待ち受けない現実に……結局、オレは、ただ研究室でくすぶってしまっただけだった。

だからだろう。

佐野という希望の水が我らが研究会が芽吹かせたこの時に。

したり顔で戻ってきたあざみを、一華は好きになれないのだろう。

「……すまん。一華。お前の気持ちをオレは気付かなくて……」

「草が謝る必要なんてないだろうに。……はあ、喋り過ぎた。こんな事言うつもりなかったんだけど」

「話してくれて助かった。今の話が出来なかったら、オレはきつと誤解したままだったと思う……ありがとう一華」

「……くっくっ、ああもうっ」

ずんずんと怒り肩で風を切る、心優しい幼馴染。

オレは間違っていた。一華は面倒見がいい、だから^{だせい}情性でオレのすることに付き合ってくれたのだと勘違いしていた。

だが実際は違った。

奴は本気で、本気でオレの理念に付き従おうとしてくれたのだ！

このどうしようもない動機を知らずとも、純粹にオレのやることに協力しようと思っていたのだ！

胸が躍る！ 心も、体も熱い！ オレは奴の優しさと本心に触れ、より一層の活力が全身に漲るのを自覚した！

「ありがとう一華！」

「……うるさいっ！」

「あざみの件についてはオレがきつと解決する！ だからちよつと待っててくれ！」

「好きにするといいさっ！」

「オレは今度こそ、貴様の期待に応えてみせるぞ！ これからもよろしくな一華！」

「わかってるよっ！」

ああクソツ、どうして気が付かなかったんだ。

一華、お前は腐れ縁なんかじゃない。このオレの最高の幼馴染だ！ この胸の高鳴りは、きつと今日明日じゃ抑えられなさそうだ……！

§ § §

夏の陽射しに磨きがかかり、生徒のそわそわが最高潮になる一学期終業式。

校長の長い一言が終わってしまえば全員が歓喜に包まれ、若人たちはとうとう約1か月の黄金の休みを手に入れたのだった！

「夏休みに突入しても我々の活動は止まらんで！」

終業式後、自然といつものように部室に集まったメンバー達は、その一言に多種多様な反応を見せた。

「マイ・ベスト・フレンド筆頭に皆の頑張りがあつたからな！ 知ってはいるだろうが我々の認知度はもはや町内どころか県外まで知れ渡っている！ 見ろこの大量の依頼を！」

「うーわあ……これはまた」

「なんだか最近になってより増えた感じするわねえ……あらま市役所

からの依頼もあるわよ。凄いわんっ」

佐野円堂 「腕がなるね」

「……へー、ふーん」

山のように机に積まれた依頼は下は幼稚園児から上はお年寄りまで、老若男女や校内校外問わずの大盤振る舞い！ 中にはすぐに終わらないようなものや、間違つてもいち高校生に頼むような内容ではないものまでと大量であり、一見すると夏休みどころか一年通しても片付けられない気もしてくるが……。

「マイ・ベスト・フレンド。やる気なんだな」

佐野円堂 「うん。みんなが困ってるならやらないとだね」

やはり佐野は事もなげに頷いてみせた。貴様ならそう言うと思っていた！ 流石はマイ・ベスト・フレンド！

そして佐野がやると言ったのであれば……我々メンバーも全力でもって協力せざるを得ない！ わかっているな皆!?

「はいはい分かっているよ。円堂君がやるって言うなら手伝う」

「もちろんよおつ、みんなに頼られるのは悪い気分じゃないし、それに感謝の言葉も気持ちいいものっ」

「……うーん……あ、ポン！ それポン！」

「……おいあざみ」

「それもポン！ ふふふ……さーってそろそろ佐野っちも年貢の納め時じゃないかな〜？」

「あざみつ、貴様はどうするんだ？」

「……え？ あー手伝い？ やつてもいいよ、夏休みはそこそこ用事とかあるけどく空いてる時間限定でね、とーりやつ」

佐野円堂 「みんなありがとう。あとそれロン。倍満16000

点。逆転だね」

「……は？ え、うそ、はああ!?! むぎいいい〜っ!! 西単騎!?!
なんでそんな待ちしてるのよ!! また負けたく〜っ!!」

あざみは携帯ゲーム機を放り投げて髪をかきむしり、悔しそうな唸り声を上げ始めた。

今のところ連戦連敗のあざみは、佐野に挑戦する口実を作りたいの

か部室に入り浸っている状態だ。

そこで研究会に依頼以外で来るのならば活動に協力しろ、と言いつけたらオレの願いをあっさりと聞いてくれた。そんなにも佐野との対戦は重要らしい。

というより最近はず勝ち負けは別として、佐野の奴と遊べる事が目的になっっているような……？

まあいい。なんであれあざみのお陰で解決できる依頼の幅も広がり、何より人手が増えた事でより一層助太刀に磨きがかかってきた。素直に喜ぶとしよう。

「思考が読めないし手も早いし、未来予知かってくらい先読みが強すぎるよ佐野っちゅ……あーもう、でも負けないからっ、はいこれ報酬だよー！」

【アイテム】

『お古のスマホ』を獲得した！

ポップで可愛い猫のシールがこれでもかと

貼られた最新機種スマートフォンだ。

超高画質のカメラ付き！

動画もサクサク見れるぞ！

【来ました、このRTA一番のキーアイテムがこちらです。このスマホがあることで全キャラ絆MAXが可能になります。このアイテムの説明は後述します】

「それってあなたのスマホじゃ……」

「いいのいいのっ、最近新しいの買っちゃったから。それに、佐野っちってスマホ持ってないんだよ？ 彼が持ってた方が活動がもつとはかど捗るでしょっ！」

「……まあね、瑠璃玉さんがいいなら」

そして佐野はイマドキの高校生らしからぬ事に、スマホを所持していなかった。

普段アルバイトをしている事からお金に苦慮しているのは見て取れる。恐らくそのせいなのだろう。

佐野円堂 「ありがとう瑠璃玉さん」

「あ。もちろん私のお古だからちやくくと私の連絡先入れてあるよっ。いつでも連絡していいからね佐野っち」

「はっ!? 瑠璃玉さんっ」

「あらああ〜っ、じゃあじゃあ私も登録してもらっちゃうわっ、ほら佐野ちゃん私の番号っ、私もエニタイムコーリングOKよ〜んっ」

「マイ・ベスト・フレンド! もちろんオレのも登録してもらうからなっ、親友であるお前ならどんな内容でも1時間から1日まで電話を受け付けるぞ!!」

「えっ、ちよっ、みんなっ」

佐野のスマホに瞬く間にメンバーの連絡先が登録されていく。

これでいつでも佐野と連絡が取れるようになるのは良い事だ!

そして奴の才能、そして人望があれば連絡先は更に埋めつくされていく事だろう!

「さて。話を戻して夏の活動だが……オレにプランがある! まずは強化地域密着! 来たる2週間後のお祭りに向けて、地方自治体イベントへの協力および参加をする!!」

「……これだね。大文字町盆踊り大会、舞台の設営の協力、あとは普通にお祭りを楽しむくらい?」

「次は遠征だ! 我々は普段山に囲まれているが、たまには海の声も聴くべき! 海の悩み事を解決していくぞ!」

「ようするに海水浴ってこと? いいじゃんいいじゃんっ、おニューの水着用意しちやおっかな〜」

「そして最後は強化合宿だ! オレの爺ちゃん家で2泊3日の地獄のトレーニングだっ! 昼は畑で汗をかき夜には肝を鍛える恐怖の二日間だっ!」

「お泊り会ね〜、草ちゃんのお爺さんにはいつもお世話になってるわっ、しかも肝試し大会つきなんてワクワクしちゃうっ!」

「当然だがこれ以外でも活動は続けていく! 基本は部室集合だが時々別の場所にも呼び出す! 各自心しておくように!」

佐野円堂 「分かったよ」

さあ今年の夏はもっと忙しくなるぞ!

我々の助太刀が一層輝くように全力で駆け抜けるぞ!!

「……えっと。あの、円堂君。私の連絡先も良かったら……。い、いつでもはダメだけど。可能な限り返答はするから……」

「このスマホで各ヒロインと連絡を取れるようになりませんが、時間確認さえ出来ればよいので連絡しませんし、連絡が来ても全て無視します。時間の無駄ですからね」

§ § §

「おっはよく、一華ちゃんは今日も早いわねえ」

「かずちゃんおはよ。円堂君の方がもつと早いよ。というか……何だかんだで研究会に毎日来るのが普通になってるかも」

「私も今はここ中心の生活よんつ、依頼が忙しいのもあるけどそれ以上ワクワクしちゃうもの」

「ワクワク……ね。うん、なんか分かるかも、窮屈で退屈な家よりかはこっちの方が楽しい」

「それもこれも佐野ちゃんのお陰ねえ。あの子の八面六臂はちめんろつびの活躍と来たら本当筆舌に語りつくせないくらいに……」

「円堂君……そう、だね」

「一華ちゃん?」

「う、ううん。何でもない、円堂君はやっぱ凄いなって思ってただけ」

「……」

「ほ、ほら! あの子ってほとんど自分の力で解決しちゃう事が多いじゃないか。ほとんど彼の力なのにそれでも少し手伝うとみんなのお陰、みんなのお陰っていうものだから……」

「あらあ……彼の力になれてるか、不安?」

「……まあ、その。そう」

「うふふふ、青春ねえ本当に……」

「茶化さないでよ……でもそう思ったりしないかい? ミスも含めて

無言でフォローしてくれるから、なんだか手伝いも余計な事してないか、心配で……」

「分からなくはないけど……いいんじゃないかしら。きつと大丈夫よ」

「かずちゃん?」

「佐野ちゃんはきつとそんな事気にしてないと思うわ。あの子はひたすらに純粹で、裏表がなくて……ただまっすぐに依頼を解決したがっている。理由は分からないけどそれこそ限界を超えてまでね……だから、手伝ってくれる事に感謝こそすれど煩わしく思うことはない筈よ」

「……」

「そして佐野ちゃんがそんなあなたを嫌うこともない筈よん」

「っ、も、もうっ……かずちゃん……っ!」

「——おう一華、葛! 今日も早くから来てくれて関心だが問題発生だ! 開かざる倉庫の鍵をマイ・ベスト・フレンドが見つけたぞ!

今から探索をするから集合だ!」

「あらあら」

「い、今行く! ……かずちゃん、ありがと。ちよつとスッキリしたかも」

【Result】

依頼『封印されし倉庫』解決!

『助太刀ポイント』を20獲得した!

「あつづううういゝゝゝつ、だだいま あゝゝゝ……」

「おかえりなさいあざみちゃん」

「おかえり瑠璃玉さん。依頼はどうだった?」

「へっへっへ、もちろんバツチリチリチリだ、大文字町盆踊りのポスターは今日で全部捌けたよ、いやゝゝゝ、案の定佐野っちがあつという間に配ってくれた! マジで凄かった!」

佐野円堂 「瑠璃玉さんが手伝ってくれたお陰だよ」

「おいあざみ！ 貴様そんなに佐野にくつつくなど！」

「瑠璃玉さん。人前でそういうのは……」

「え〜、でも佐野つちは嫌っていつてないもん〜、ね〜いいよね佐野つち〜？」

●瑠璃玉さんがいいなら…。

○ちよつと恥ずかしいかな。

佐野円堂 「瑠璃玉さんがいいなら……」

「ほらね！ さつすが佐野つち、私のライバルっ！ わかつてるじゃんっ〜」

「円堂君っ」

「ぐぬううう……マイ・ベスト・フレンド！ このような奴に情けをかけるなど！」

「はいはい、収集つかないわよんみんな。ほらあざみちゃんもべたべたは程ほどにねんっ」

「はあ〜い」

「……ふんっ、まあお疲れ様だと言っておこう。しかしあれだけ大量のチラシを30分も経たずに配りきったというのか？ あ、いやマイ・ベスト・フレンドの力を疑う訳じゃないが！」

「いやいやそれがさ、二回言うけど凄かったんだよ佐野つち！ 大量のチラシを抱えた状態でスマホを見始めたと思ったらさ、その状態を維持したままスライディングとジャンプの連続!! 不可能と思える体制で町という町の人にチラシを次々渡していったんだよ！ 体感時間は2時間ほどだったけどでも実際は30分しか経ってないなんて！ あれは流石のあざみちゃんにも真似はできないね〜」

「スマホを起動すると時間が確認できますが行動が出来なくなりますが、しかしスマホ起動⇄キャンセルを3回繰り返すと、時間を確認しながら行動が可能になります。そしてその状態だと行動をしても時間が進まなくなります」

「おいおいマイ・ベスト・フレンド。お前はどれだけオレたちを驚かせてくれるんだ！」

「すっごおいつ!!」

「もう円堂君について驚くのはよした方がいいかな……でも、凄いよ円堂君」

「でっしょ!? でしょでしょ! いや〜やっぱあざみちゃんを負けす人だもん、このくらい凄くて当然だよつ、んふふふ」

佐野円堂 「おっつと……」

「あらあらあん? あざみちゃんはもうべつたりねえ、妬けちやうわあん」

「ぐぬぬぬ……!」

「……っ」

【Result】

依頼『お祭りの準備①』解決!

『助太刀ポイント』を30獲得した!

「えーつと……x||2の時に、yが……yが……分かん……分かんぞぞ! マイ・ベスト・フレンド!!」

佐野円堂 「その問題は……」

「ピピーツ、立浪つちイエロカードく、お助け佐野つち3回目く! お助けは二回までつて言ったでしょ〜?」

「ぐ……し、しかしだな! この問題はあまりにもオレの知識からかけ離れ過ぎている!」

「自分で解かないと勉強にならないでっしょ〜?」

「久しぶりに瑠璃玉さんに同意できるね。その通りだ草。久しぶりに雑草の意地でも見せてみたらどうだい? 宿題は自分の力で解いてこそだ」

「草ちゃんの気持ちは分からないでもないけどねえん……普段からお勉強してないと本当にこの課題は辛いわあん……お嫁力は養ってきたけど、学問はからきしだから尚更っ」

「そうだ! オレも助太刀力は養ってきたが勉学は全くだぞ! 人に

は向き不向きがある!!」

「確かに不向きかもしれないね。それ中1の問題だし」

「あははは、まあがんばがんば。私と佐野っちはもう課題終わらせたからね。極力教えてあげるよんっ」

「解せぬ!! 解せぬぞ!!? マイ・ベスト・フレンドは分かるがあざみは解せぬ! どんな魔法を使った貴様アアア!!?」

「知らなかった? あざみちゃんって実は天才なんだよつ、ぶいっ☆」
「草ちゃん、あざみちゃんは佐野ちゃんに継ぐテスト成績上位者よん?」

「天は二物を与えずというのとは絶対嘘だ畜生ツ!!」

「とく〜とく〜ろ〜ろ〜で〜〜佐野ちゃん〜〜つ、この化学式良く分からないのよ〜〜つ、教えて教えて教えてええんっ!!」

「……ね、ねえ。円堂君。良かったら私もここについて聞きたいんだけど」

○両方とも自分で教える。

●瑠璃玉さんにも手伝ってもらおう。

佐野円堂 「ごめん、一華は瑠璃玉さんに聞いて貰っていい?」

「おお〜? 今私頼りにされてるっ? んっふ〜、いいよいいよ〜、どんどん頼ってって! じゃあイツチ〜私が手取り足取りっ、教えて進ぜよう〜」

「……ええ」

「それでね、このベンゼンとかジクロロメタンとかがどうしたらこんな形に——」

佐野円堂 「それはこの円環が——」

【Result】

依頼『夏休みの宿題』解決!

『助太刀ポイント』を10獲得した!

「……ふんっ」

「うおおおおおおお〜〜〜っ!! 海だぞ葛あああああ〜〜〜
〜っ!!」

「雄才オオオオオオオ〜〜〜っ、素っ裸のイケメン共が布キレつ
けて魅せつけてくれとるわ〜〜〜っ!!!」

「……テンション上がりすぎでしょ全く」

佐野円堂 「海は人をおかしくするんだね……いい天気だから」

「まあ山育ちの私たちにとつては輝いて見えるよね〜、ところで円
ちゃんは行かないの〜? 迷ってたりする?」

「円ちゃんって……:というか円堂君は円堂君のペースがあるんで
しょ。準備運動とか」

佐野円堂 「うん。準備運動は大事」

「ふう〜ん、まあ確かにね。それじゃあさそれじゃあさ……じゃじゃ
〜〜〜んっ」

「っ!? ちょ、何だいその攻めた水着!」

「ふっふ〜ん、どうようどうよ円ちゃん。本邦初公開っ、悩殺ビキニだ
ぞ〜、結構惹かれちゃうでしょ?」

佐野円堂 「すごく似合ってるよ」

「でっしよ〜〜〜っ!? で、で、で。そんな特別な悩殺ビキニのあざみ
ちゃんを〜、なんとっ、円ちゃんには特別にオイル塗りさせてあげ
ちやいま〜すっ!」

「……瑠璃玉さん? オイル塗りくらいなら私がやるけど?」

「いやいや〜、イッチーじゃなくて私は円ちゃんにして欲しいんだか
らさ〜。ほらほら塗って塗って〜」

● オイルを塗る。

○ 一華にお願いする。

佐野円堂 「ゴクリ……じゃあ、やるよ? あざみ」

【今作随一のベストスケベシーンです。一華にお願いすると一華の水
着が見れるシーンもあるけど、こつちの方がテキスト量が少ないので
選びます。貧相キャラなんていらねえんだよ!! (暴言)】

「んっふふ〜、正直でよろしいっ。正直者にはご褒美に、ちよつとオイ
ルを塗りすぎちゃっても許しちやおつかなく♪」

「……ッ、私、ちよつと飲み物買ってくる……!」

「——漢最高漢最高っ! ファンファンファンツ!!」

「——ひやアツはははあゝゝゝっ! 海最高っ、海最高っ! ……つてなんたるスケベ水着姿!? あざみ貴様か!」

佐野円堂 「おかえり二人とも」

「おつかえりゝゝっ、ご機嫌だねえ。いえーい似合ってる?」

「直視できないくらいにはな!!」

「あらやだあざみちゃんったら、本当に似合ってるわんっ。セクシーっ!」

「かずつちーありがとゝゝっ、かずつちーもそのブーメラシ合ってるよっ! 肉体美と合わせてなーいすセクシーっ!」

「む? ところで一華の奴はどうしたんだ?」

「んんん? そういえばさつき飲み物買ってくるって言ってたよ」

「……そうか。分かった、じゃあオレが迎えに行つてやろう! 奴一人はぐれてしまつても困るからな!」

「久しぶりに部長らしいところ見せてもらえるのねえん……つてあや冗談よ冗談っ! いつてらっしやい草ちゃんっ」

「ふんっ、貴様らもはぐれぬ様にそこで待っているといい!」

【Result】

依頼『海水浴』解決!

『助太刀ポイント』を10獲得した!

「遅いぞ貴様ら! 時間厳守だといつただらうに!」

「うるさいよ草。女の子は着替えたら終わりとはいかないんだから」
「そうよんっ、草ちゃんもうちよつと女の子に詳しくならないとっ」

「——イエーイ、待ったく? あざみちゃん登場っ」

佐野円堂 「お待たせ」

「二人とも遅いぞ……つて貴様ら腕組みして登場とは何事かあつ!」

「いや〜、途中で偶然にねっ。偶然円ちゃんと出会ったらから一緒に行く〜ってなってるさ！結構ペース合わせるの大変だったよ〜、スライディングとジャンプを何度も繰り返すからっ」

「ついていくだけでも凄いなと思うわっ……それにしても。うふふ、一華ちゃんもそうだけどあざみちゃんも浴衣、可愛いわね〜っ、花火柄っ、すっごくお洒落よんっ！」

「えっへへ〜、わっかる!? わかる〜？ これ今日のために下ろしたお気に入りにゃだよね〜っ、円ちゃんもどう思う？ 似合う？」

佐野円堂 「とっても似合うよ」

「ふふふふ〜んっ、そうでしょそうでしょ〜っ」

「……本当、綺麗ね。私のと大違いなくらいに」

「そ、その通りだな！ 一華。貴様の浴衣はその……大違いではあるがそれはあれだ！ ベクトル的な意味で、全く似合わないわけではないが！」

「はっ？」

「うふふふ……甘酸っぱいわ〜」

佐野円堂 「その紫陽花の浴衣もとっても似合ってるよ」

「……っ……そ、そう？ そうかな……？ その、お祖母ちゃんのお古だけど……嬉しい」

「むうう〜……ねえっ！ 設営活動のお礼に屋台の無料チケット貰ったよねっ、盆踊りの時間までに手分けてして色々買ってこようよ！」

「あらいいわねえ、じゃあ集合はこの櫓の前ね……で、佐野ちゃんは誰と行くのかしらん？」

○草と行く。

○一華と行く。

●あざみと行く。

○葛と行く。

佐野円堂 「せっかくだし、あざみと行くかな」

「おっ！ お目が高いね〜、もちろん喜んでっ！ ねえねえ途中で射的とかやろうねっ！ 絶対負けないからさっ!!」

「あらあん……じゃあ私達はどうするっ？」

「……そうだね。それなら三人で……」

「いや、すまないが葛。オレは一華とちよつと話がしたいから……いいか?」

「! ふふ、いいわよおん。じゃあごゆつくりんっ」

「はあ? いや、ちよつとかずちや……もうっ! 何だよいきなり話って」

「すまん。いや、買い食いしながらでいいんだが……少し気になる事があつてだな」

「……何」

「その前に確認だが……お、お前はマイ・ベスト・フレンドが好きなの……あつだあ?!」

「~~~~っ!!」

「だからその手を! 出す癖を! やめろ! 大体その行動で大体わかるからな!」

「……う、ううう……な、なんだよ。草のくせにそんな分かったような……恋愛なんてしたことないくせにっ」

「舐めてくれるなよ。数多の恋愛シミュレーションをやりこなしてきたオレだからこそ、貴様の心情など丸わかりだ! あとのその赤い顔で特にな!」

「だ、だったらどうだつていうんだ……何? お似合いじゃないからやめろつて言いに来たのかい? それとも本気で円堂君のことを草が狙つてゐるつていうのかいつ?」

「そういう話ではないっ、その……逆だ。……あー応援、そうっ、お、応援をしにきただけだつ。貴様とマイ・ベスト・フレンドの仲を取り持つ。オレはいわゆるキューピット!」

「は……はああ? それ、正気で言ってるのか?」

「ほ、本気だ! 本気だとも! 分かっているだろうがオレは貴様の幼馴染だぞ、幼馴染が困っているのなら助ける! それでこそが幼馴染だ!」

「っ——馬鹿。本物の馬鹿よお前は……気持ち嬉しいけど別に、間に合ってる。それに自分の事なんだから自分で解決するし」

「佐野にそれとなく避けられていてもか？」

「――」

「少し前からか、奴はお前の誘いを断るようになっていっていると感じていた。オレの時のようにな。ああおじさん、このたこ焼き15個入りよろしく頼むっ！」

「あいよっ！」

「そんなの……偶然だよ。円堂君とは偶然タイミングが合っていないだけ」

「その偶然がいくつ続いた？ オレは少なくとも、ミサンガを渡した日から佐野と二人きりになる日は一度たりともないぞ！ そしてスマホに連絡しても全然音沙汰なしだ！」

「なんで誇らしそうにするんだお前は……」

「はっはっは！ 例外なく一度たりとも二人きりになれないのがいつその事潔すぎてな！ ほら、たこ焼きだぞ。好きだろ？」

「……貰うけど。でも仮にそうだとしたら……急になんで？ どうして？ お前と同じで私、気味悪がられたとか？」

「全力で失礼だな貴様は!? というか気味悪いわけがないだろう。貴様はその、最近はおレの目から見てもかわ、かわ……い！ し、その浴衣もその……凄く似合っ……」

「あっつ、はふっ……美味し……え？ なんて？」

「……。まあとにかくだ。貴様は気味悪がられた訳ではない。むしろ好かれている方だと考えている」

「それならどうして避けるという結論になるんだよ」

「あくまでオレの持論だが……もう貴様に構う必要がなくなった。と考えている。そう、オレと同じようにな！」

「構う必要がなくなった……？」

「そう。貴様はギャルゲー同じく攻略対象でありながら早々に攻略され、もはや陥落寸前！ というか堕ちていると言ってもいい！ そして才能溢れたリアル主人公の超人であるマイ・ベスト・フレンドならば次はこう考える！ 『ハーレムを目指してやる！』……と！」

「……あ……？」

「つまりだ！ オレは攻略された、お前も攻略された！ そして次なるターゲットがあざみという訳だ！ そして一度狙ったターゲットに好感の集中砲火するのはギャルゲーの基本！ それ以外に時間を割いてるのが惜しいから相手をしないという事だ！」

「……」

「どうだ、オレの経験も馬鹿にしたものじゃないだろう？ この理論に穴は……うあつっ！ あつふう！ たこやきには、には口にいれるのは、はんそくらろおっ!!？」

「真面目に聞いて損した。馬鹿馬鹿しい」

「ま、待て！ 悪かった！ 実際はそうじゃないかもだが、オレが貴様を応援するのは間違いないぞ！ おい、おおうっ!!？」

【Result】

依頼『夏祭り』解決！

『助太刀ポイント』を10獲得した！

§ § §

黄金の日々は瞬く間に過ぎ去り、夏休みは今や片手の指で数えられる程しか残されていない。

しかし我々助太刀研究会の活動は日々を無駄に過ごすことなく使い、校内町内問わず様々な場所でまさしく鬼神の如く働きぶりを見せ、依頼の悉くを完璧に達成してきた。

無論それだけではなく、目的もなく皆で遊びにいったし、夏休みの宿題も協力してやったり、日焼け跡がくつきり残るまで海水浴で楽しんだ。夏祭りは屋台を食べ歩き、皆で踊り、そして花火を見てひと夏の思い出を刻むという、まさしくリアル充実の日々を過ごしていた！

そして今！ 我々は最後の夏の思い出を作ろうと強化合宿の会場に来ている！

我が家から電車で1時間半！ 田舎である大文字町から更に文明

という文明を取り除いた山の奥、ここがオレの爺ちゃんの家だ！

「ふはあく……あくごちそうさま〜つ、ごはん美味しかった〜つ」

佐野円堂 「ごちそうさまでした。」

「本当ねえつ、うふふ〜、夜を眺めながらこのスイカを食べるのもまた風情あるわあく」

「草のお爺さんとお祖母さんに感謝だね、極上の料理を用意してくれるから……なんだか悪い感じがするよ」

「気にするな！ うちの爺ちゃんも祖母ちゃんも賑やかなのが好きだし、対価は昼の手伝いで貰っている！」

我々は爺ちゃんの家で強化合宿という名のお泊り会を楽しんでいた！

一日目はそれこそ電波も何も届かない環境にあざみがごねていたが、大文字町とは打ってかわった大自然の美しさと、美味しい料理の数々にすぐに機嫌をよくし、皆で楽しく二日目の夜を過ごしている。

爺ちゃん祖母ちゃんの依頼も解決できたし、万事OKだ！ しかし

……このお泊り会はこれで終わりではないぞ！

「さあ貴様ら、腹もおさまっただろうが……まだ寝るには早いぞつ！ 助太刀研究会強化合宿、最後のイベントが待っている！ ——肝試しだ！」

「うわ……やつぱりやるんだ」

「えつ、ちよ、本気？ こ、この辺りでやるんだよね？ すっごいガチそう……」

「これが中々にガチなのよねえ……あざみちゃん、コレは怖いわよ〜」

佐野円堂 「ドキドキする」

「ふっふっふ、恐れおののくのはまだ早いぞ。ルールを説明しよう！ 二人でペアになって、奥の廃神社に括りつけられた鈴をとって、そして戻ってくる！ 以上だ！ ペアはちなみにくじ引きで決めるぞ！」

「つていうか私たちは合計で5人じゃないか。2人ペアだとどう考え

ても余るんじや……?」

「無論! 一人余る! しかし大丈夫だ! 余った人には、うちの爺ちゃんがついて行く! 爺ちゃんは頼りになるが……怖いぞっ! 道中でガチの恐怖体験を教えてください!」

「絶対嫌なだけど!」

くくく、あざみは去年参加してなかったが……そうかそうか! 奴は怖いのが苦手か!

だが残念な事に……今日はあざみにはとことん怖がつて貰うとしよう!

そしてオレはパニック状態のあざみをなだめる葛と佐野を尻目に、こっそりと一華に耳打ちする。

「一華よ、貴様にはこのクジと鉛筆を改めて渡しておく……」

「は? なんでそんな真似……って白紙じゃないか」

「馬鹿、静かにしろっ。貴様、マイ・ベスト・フレンドと更に進展したいんだろう……? クジは先にひかせて、番号を言わせる。あとは……分かるな」

「……ちよつと!」

「教本ギヤルゲーによれば肝試しのドキドキ効果は恋愛につながる可能性は非常に高い……! 怖くなくても抱き着け、そして押し倒せ!」

無理くりクジを押し付けてやると、一華と来たら見た事ない程に顔を真っ赤に染めて狼狽ろうばいした後、顔を伏せてこくりと頷いた。

……ああクソツ、不覚にも胸がときめいた……本当に可愛い奴だ貴様は! だが、だが一華が好きだと思っっているのなら……全力で推すまでよ! オレは横恋慕よこれんぼなどという無粋な真似はしない。こうなったら絶対に、絶対に貴様には幸せになつて貰う!

「言っておくがこれは強制だ! さあクジを引いて貰おうか!」

○手前にあるのを取る。

●右隅にあるのを取る。

○左隅にあるのを取る。

○何だこの変なのは…。

○ちよつと待つて。

「ここからがこのRTAの真骨頂です。選択肢は上から二番目が一華、三番目があざみになってるので、まず一華を選びます。何も書いてないを選ぶと葛ルート確定になって夏でENDINGを迎えてしまうので絶対に選んではいけません」

「マイ・ベスト・フレンド！ 何番だ!？」

佐野円堂 「2番……だね」

「ふむ。なら次は一華。貴様はどうだ!」

「……えつと……つ！ に、2番、みたいだね」

「!! え、これもう揃ったんだけど？ もうイッチーと円ちゃんは確定なの?」

「そうだ！ そして決まった奴から先に行ってもらおうぞ!」

「え、ええええくくそ、そんなあくくつ、円ちゃんくくつ」

「あらあん……残念。私も佐野ちゃんと一緒に行きたかったのに」

佐野円堂 「ごめんね。先に行かせて貰うよ」

「円堂君、よろしくね……じゃ、じゃあ行ってくるから」

——そうしてオレの目論見通り、佐野と一華は夜道に消えていった。

ふつ。うまく言ったようだな……ここから神社までは歩いて30分。如何に奴が速足とは言え、たつぷり20分は二人きりだろう!

奴がなぜかスマホを覗き込み続けていたのは気になるところだが……まあいい。これで奴は一華ルート確定間違いなし! あざみには悪いが、現実でハーレムは許されない。佐野は一華に譲って貰うぞ!

「さて、では我々も次のクジを引くでしょう——」

○手前にあるのを取る。

○右隅にあるのを取る。

●左隅にあるのを取る。

○何だこの変なのは……

○ちよつと待つて。

佐野円堂 「2番……だね」

「ながら見バグで時間を止めて、一華を置いてスライディングで山道を駆け上ってさっさと鈴を取ります。鈴を取った後神社から出ようとする、絆MAXイベントが発生しますが、神社からワープで逃げるとイベントスキップが可能になります。内部的にはフラグは立っているのでイベントを見た扱いにはなっています。」

「か……？」

……んん？ 佐野、なんで貴様はまたクジを引いているんだ？

というか、貴様は肝試しに出発したんじゃないのか？

「私は……3番みたいだね」

「つ、次は私だよね？ ……えっと、2番！ や、やったくくく円ちゃん

と一緒にさっさっさっ!!」

待て。どうして、どうして一華もここにいるんだ？

貴様もまた佐野の奴と一緒に出発した筈なのに……それに、なぜ一華は奴と同じ番号になっていない？

「円ちゃんお願いっ、私、マジでマジでこういうの無理だからっ、本気で頼りにしてるからねっ!!」

佐野円堂 「出来る限り頑張ります」

【重要なのは、このくじ引きイベントが21時ぴつたりに開始されるイベントという事です。つまり21時ぴつたりスタートして、1分も経たずに戻ってくればまたクジが引けるのです。これにより絆MAXイベントが量産出来ます】

「あらあん……残念。私も佐野ちゃんと一緒に行きたかったのに」

「お前たち、ちよつと……ちよつと待て……」

「い、行つてきまゝ……いや、円ちゃんほんとガチで！ ガチでお願いね！ 私無理だからー！」

佐野円堂 「はいはい」

オレの静止の声さえ聞かず、佐野もあざみも夜道へ消えていってしまふ。

奴はあざみを一瞥いちべつすることなく、やはりスマホに視線を向けたまま
で……そしてそんな光景に一華も葛も違和感を覚える様子がなく、そ

れがどうにも恐ろしかった。

「い、一華……お前、さつき佐野の奴と一緒に行ってなかったか？」

「……何言ってるんだ草、今を見てなかったかい？ クジは外れてたじゃないか」

「い、いや確かにそうだが……な、なあ葛！ さつき見ただろ？ 一華と佐野の奴が！」

「どうしたの草ちゃん？ まだ決めたのは一組目だけじゃないのよんっ。もう、ほらさつきと次のクジを引きましょう」

き、気のせい……気のせいだったのか？

しかしさつき、確かに佐野達が……いや。はは、ははは……確かにそうだな。オレは疲れていたのかもしれない。だって一華も葛もこう言ってるんだから——

○手前にあるのを取る。

○右隅にあるのを取る。

○左隅にあるのを取る。

○何だこの変なのは…。

●ちよつと待って。

佐野円堂 「ごめん。肝試しはちよつと待ってくれるかな」

【そして一華と同じ要領でイベントスキップから元の場所に戻ってきたら、一度肝試しをキャンセルすると、神社の鈴がインベントリにあるため肝試しの終了フラグが立ちます】

「あら、佐野ちゃん何か準備をすることでもあるのん？」

「待ってるよ」

「円ちゃん、早く戻ってきてねえ……」

「……なんで」

だがそんなオレの混乱をあざ笑うかのように佐野の奴はまたこの場に戻ってきていた。そして一緒に出掛けた筈のあざみでさえもしれっとオレの隣に居た。まるでワープでもしてきたかのように。

全身からブワッと冷たい汗が噴き出した。

一体何が起こっているんだ？ 何故こんな事が起こりえるんだ？

いきなりタイムリープでもし始めたのか、それともオレは夢でも見

ているのか？

佐野がこれでクジを引くのは3回目だぞ。一華と行った筈なのになかった事にされ、あざみと一緒に行ったと思えば、それもなかった事になった？ そんな事ありえてたまるか。

周りもどうして違和感を覚ええない？ どうして一華もあざみも葛も、今の状態を平然と受け入れられるんだ!?

いまだ現状を認識できない中、オレの元に佐野が近づいてくる。

奴はいつも通りの無表情で、どこも普段と変わった様子は見受けられない。

でも普段と全く変わらないからこそ、オレは怖くなった。

コイツが、まるでこいつが別次元の生物のように思えてしまったから。

冷や汗をかき、身動きの動けないオレに、奴はとある物を手渡してきた。

それはこのタイミングでは絶対に手に入れていた筈のない、あるアイテムだった。

【アイテム】

『神社の鈴』を草に手渡した！

「——おお！ マイ・ベスト・フレンド早いな！ もう戻ってきたのか！」

待て。オレも、何を言って——。

「確かに鈴は受け取ったぞ！ で、肝試しはどうだったか？」

佐野円堂 「中々スリルがあつたよ」

「はっはっは！ 何たつてうちの爺ちゃん肝入りだからな！ だが最高の夏の思い出も作れただろう!？」

オレの口が自分の意志に反して勝手に言葉を紡ぎ出す。

感情を置き去りにし、普段のオレらしい台詞がばらばらと口元から零れ落ちていく。

どうして。なぜオレはこんなことを口走っている？

というか、まだ肝試しが始まって1分も経っていない。なのに、なぜお前がその鈴を持っている？

「いや、今年も怖かったわねえ……本当恐ろしかったわあ」
「うううう……マ・ジ・で！ 怖かったんだからあ！ もう二度と行かない！」

「な、なかなか怖かったんじゃないかな？ ま、まあ私は平気だったけれども……」

みんなだつてそうだ！ お前達はまだ肝試しを味わっていない筈だろう。

なのに何でそんな事を？ 誰と行ったつていうんだ？ 誰もおかしいと思わないのか？！

「さあこれで肝試しは終わりだ！ 今日の依頼の疲れもあるだろう！ 早いうちに寝てしまおうぞ！」

しかしそこに疑問を呈する存在はオレ一人しか存在せず。

オレは訳も分からずに、ただ自動で流れ続ける一幕を、まるで他人事のように眺める事しか出来なかった。

【Result】

依頼『肝試し』解決！

『助太刀ポイント』を10獲得した！

§ § §

強化合宿の帰り道。

ほぼ貸し切り状態の電車、その心地よいリズムに揺られてメンバーが眠っている中。オレは窓の外で流れる景色を無気力に眺め続けていた。

「……何見てるんだい？」

「一華」

対面式の椅子に座りこんで、正面窓側に座っていた一華が、眠たげな^{まぶた}瞼をゆったりと開けてオレを見ていた。

「何でもない。昨日のことを思い返していただけだ」

「肝試しの事？ ……私は毎年草のお爺さんの家にはお邪魔するけ

ど、やっぱり慣れないね。本気でびびっちゃった……」

「ふん。まだまだだな、オレは。小さな頃にビビらされまくってチビりまくったから最早怖いなどという感情は抱かないぞ」

「サイテーだね」

気だるげに、頭を預けて微睡むまじろ一華と視線が交わされる。

オレは一華の眼が今までと違って美しく見える事に気が付き、すぐに視線を逸そらしてしまった。

「それにしても……」

「……何？」

「その……なんだ」

「だから何だよ……はつきりと言ったらどうだい……」

今にも眠ってしまいそうな声で返事をする一華に、オレはどうしても言葉を続ける事が出来ない。

今でも昨日の謎の出来事を覚えている。だが、昨日の出来事に対して皆は何も違和感を覚えていないし、朝食の時も皆で肝試しを楽しんだという共通認識が残っていた。

もはや自分が夢を見ていたと疑った方が早いくらいには、自分だけ取り残されていた。

「……昨日の、き、肝試しはなんか変じゃなかったか？」

「はあ……？」

「いや……自分でもおかしいとは思うんだが、ちよつと記憶が飛び飛びなんだ。お前と佐野が肝試しに出掛けたと思ったら、次にあざみと佐野が肝試しに出掛けて……その後、1分も経たずに肝試しは終わりになっていて」

「……何を言ってるんだ草は。とうとう馬鹿すぎて狂ったのかい……？」

「……そ、そうだな……うむ。その通りかもしれない」

「認めるくらいなら本気で……病院にでも行ったらどうだい……全く」

一華はいよいよ眠ることを決めたようだ。

体勢を変え、自然かつ安心出来るポイントを探して体重を預ける

と、そのまま瞼を閉じ始めた。

そう。か。そうだよな……きつと夢を見ていたんだ。疲れていたせいだろう、意識が飛んで記憶が混乱していたのだろう。

あんなおかしな出来事が現実起きるわけないじゃないか。全く、オレとした事が情けない！ これでは部長失格だ！

オレは苦笑すると同じく窓枠に体重を預け、皆に倣ならって眠り始めようとする。

しかし、眠りに入る直前。オレは一華の声に意識を傾かたむけざるを得なかった。

「……ねえ。肝試しの事だけど……ありがとう」

それは今にも消え入りそうな、か細い声だった。

「私は、草が力添えしてくれたお陰で……円堂君と二人きりで話す事が出来た」

奴はふにやり、とどこか弛しかん緩した表情でこちらを眺め、

「その時思った事、他愛ない事、今後の事……そして、私の気持ちの事を、ちゃんと話したよ……」

今もなお体重を預ける存在に、改めて体をすり寄せた。

「今はまだ……返事は貰ってないけど……でもね、私は今なら……円堂君が好きって自信を持って言える……」

握りこんでいた手がゆるゆると解けていくのが見える。

掌から紙片が零れだす。

「……そう思えたのは草の手助けのお陰。だから……ありがとう……おやすみ」

くたくたになった紙片は自然と広がってゆき、そして正体を現した。

それはあの時のクジだ。

一華らしい几帳面な文体で書かれた「2」が、オレの前に現れたのだった。

「……」

——そうして一華は、座席中央で眠る佐野の肩に頭を置いたまま。

幸せそうに眠ってしまったのだった。

「どうやら……当初の作戦通り、一華は思いを告げることが出来たみたいだ。」

「思うところはない訳ではない。」

「だがこんな幸せそうな笑みを見るとそれを否定する気力は起きない。」

「そうさ。素晴らしい事だ。」

「これは大切な幼馴染の、大切な第一歩。」

「祝うことは出来て、どうして呪う事など出来よう！」

「その相手も、他でもないオレが認める心の友である佐野だ！ きつと仲睦まじいベストカップルになれるという確信もある！ ……なのに、なのに……！」

「なんで、こんなに嫌な感じがするんだよ……ッ」

「オレは目の前の光景に、どうしても不安を拭^{ぬぐ}う事が出来なかった。」

「佐野にもたれ掛かっているのは、一華だけではなかった。」

「その左隣にはあざみが自らの腕をしっかりと絡め、そして幸せそうに眠っていた。」

【Information】

『紫花一華』との関係が

『絆MAX』になった！

秘めたる彼女の思いに、キミは

触れる事が出来たようだ……。

【Information】

『瑠璃玉あざみ』との関係が

『絆MAX』になった！

才能故に孤独を味わう彼女と

唯一競い合う存在になるだろう……。

「一華とあざみ攻略完了です。これでもう彼女たちは構う必要はなくなつたので、後は秋に加入予定の最難関ヒロイン撫子ちゃんを全力で構いに行きます！」